*土曜講座　イギリス・エコツアー報告*

# 土曜講座で初めて海外へ

薮　玲子

## ◆◆ツアーの企画◆◆

「土曜講座のメンバーで海外に出かけてみたいね」
数年前から冗談めかして話していた。それが一挙に具体化したのは、土曜講座のメンバーで現在イギリス在住の滝知則・光子ご夫妻が、「イギリス・エコツアー」を提案してくださったお陰である。光子さんの友人である私が、彼らの意見を参考にして、今回のツアーの企画や手配を受け持つことになった。

できるだけ安上がりに手作りの旅行をするには、旅行業者の格安プランをベースに使うのがコツだ。今回私が選んだのは、阪急交通社の個人旅行プランで、ロンドン往復の直行便の航空チケットとロンドンでのホテル 4 泊（朝食、税サービス料込み）がついて 129800 円だった。

出発と帰国の日程は自由に組めるし、上記のもの以外はついていないので、自然と手作り旅行になる。７月のイギリスは日照時間も長く、雨は少なく、１年で最も過ごしやすいという。梅雨の日本を抜け出し、涼しいイギリスを楽しもう！と、日程は６月 29 日（金）から７月９日（月）までの１１日間（イギリスに９泊）に決めた。

参加者は６名。土曜講座の代表である上田昌文さん。大学院生の瀬川嘉之さんと重松真由美さん、主婦の加納恵美子さん、黒木和子さん、それに私である。男性 2 名、女性 4 名という人数構成は、ツインルームを基本に旅行するには最適である。しかも瀬川さんは 5 年前にロンドンの科学博物館に８ヶ月間仕事でいらしていた経験があるという。まさに鬼に金棒だ。

ロンドンの他には、もちろん滝夫妻が住んでいるコヴェントリーも訪れる。瀬川さんはテルフォードにあるアイアンブリッジ村にぜひ行きたいという。ここは世界最古の鉄橋が現存し、そのまわりには１８・１９世紀のイギリスの産業を紹介する博物館がいくつも点在しているそうで、瀬川さんは前から一度行きたかったのだそうだ。

私は１０年前に訪れて以来すっかり魅了されてしまったコッツウォルズの美しい田舎を再び訪れたかった。

４月２９日に土曜講座の常連の猪野修治さんが主催する「湘南科学史懇話会」に瀬川さんと一緒に参加した時、講演者の里深文彦さん（武蔵野女子大学）からウェールズのＣＡＴ（Centre for Alternative Technology）の話を聞いた。1975 年に「若い理想主義者」が「もうひとつの生活」を実践するために住みついた実験場で、25 年経った今では「持続可能な技術」の情報発信地として世界的にも注目されているという。二人の意見は一致した。よし、ＣＡＴまで行ってみよう！

こうして出来上がったのが次のプランだった。

６／２９　成田１１：００発　ヒースロー１６：００着
６／３０　科学博物館見学
７／０１　自由行動（ロンドン）

７／０２　自由行動（ロンドン）
７／０３　コヴェントリーへ　滝家を訪問
７／０４　アイアンブリッジ村を見学しウェールズへ
７／０５　ＣＡＴ訪問
７／０６　コッツウォルズ訪問
７／０７　ロンドンへ
７／０８　ヒースロー１３：００発
７／０９　成田９：００着

このプランを滝夫妻に見せたところ、アイアンブリッジ、ＣＡＴ、コッツウォルズの３日間は車でまわるほうがよい。友人に最適の運転手がいるから、掛け合ってくれるという。テッドさんという６０代の方で、すでにリタイアして時々はパートで運転手をされているそうだ。しかもウェールズ出身の方なので、ウェールズの地理には詳しい。願ってもないことだった。

その後５月中旬に一時帰国した滝夫妻は、コッツウォズで開催される国際音楽祭のプログラムやコヴェントリーでのホテルのリーフレットなどを携えてきてくれた。

いっぽう、土曜講座の電磁波プロジェクトのメンバーで電磁波問題のＮＰＯ「ガウスネットワーク」の代表の懸樋哲夫さんからは、イギリスの電磁波問題の現状を探ってほしいと依頼され、現地ＮＰＯの「パワーウォッチ」の連絡先を渡された。

6月5日には瀬川さんと重松さんと一緒に武蔵野女子大学の里深文彦さんの研究室を訪れ、ＣＡＴやウェールズの話しを伺った。

着々と準備が進んでいた。６月半ばからは、いろんな手配や現地とのやりとりでがぜん忙しくなった。私の心は早くもイギリスに飛んでいて、毎日がわくわくとして楽しく充実していた。旅はおそらく、準備をはじめた瞬間から始まっているのだ。

## ◆◆いよいよ出発◆◆

## ◆6 月 29 日金曜日◆

午前１１時、ヴァージン・アトランティック航空機は予定通り成田空港を飛び立った。さあ、いよいよイギリスに向けて出発だ。私は前夜まであれこれ忙しく、ようやく荷作りを終えたのは明け方で、ほとんど眠らないまま家を出てきたので、12 時間のフライトの間に少しでも休んでおこうと、機内サービスのワインを 2 本立て続けに飲んだ。

イギリスは私にとっては思い出深い土地だ。1981 年、３歳と１歳の娘を母に預けて出かけたヨーロッパ旅行の最初の地がロンドンだった。当時私は 20 代後半だった。1991 年には 13 歳と 11 歳の娘たちと母を連れて、ヨーロッパを１ヶ月かけて汽車でまわった。その旅の最初と最後に立ち寄ったのもイギリスだった。今回は 20 代の娘たちに「留守をお願いね」と頼んで出かけてきた。つい昨日のように思えるのに、月日の経つのはなんとはやいことだろう。なつかしいロンドンの街で 20 代の私や 30 代の私に出会えそうな気がする。

寝付けないまま、とうとうヒースロー空港に着いた。

現地時間は 7 月 29 日午後 4 時、日没が 9 時半すぎの夏のイギリスではまだまだ真昼とい

う感じだ。私たちの宿泊するホテルはロンドン郊外のハマースミスにあるベンコートホテルで、ヒースローから地下鉄に乗ると、ロンドンの中心地に入る手前にある。最寄りのレイベンスコートパーク駅から徒歩２・３分の便利な立地だ。ツイン３部屋を阪急交通社を通して予約していた。フロントでもらったキーを部屋割りにしたがって手渡しながら、私は言った。
「部屋に入ったら、まずライトはつくか、お湯は出るか、ドアの鍵は壊れてないかを確かめてください」
それぞれがいったん部屋に入ってから、廊下に飛び出してくるまで５秒とかからなかった。
「この部屋ツインじゃない！！」
なんとダブルベッドが１つあるきりなのだ。
「あんなにツインと言ったのに……。今すぐ替えてもらってきます。」
ただ、３部屋のうち１部屋は他の部屋の 1.5 倍くらいの広さがあり、ダブルベッドの他に小さなシングルベッドもある。窓からはテムズ河が一望に見えてなかなか良い部屋だ。そこで、その部屋はそのまま確保しておいて、あとの２部屋を替えてもらうことにした。ところが、その日はもうすでに満室で動かしようがないという。「明日にはなんとかツインを用意するから」と。せめてエキストラベッドをいれて欲しいと言っても、それもすべて出てしまってないという。こうなったら値切りたい気分だけれど、旅行社を通しているのでそれもできない。結局、朝食を通常のコンチネンタルから５ポンド高いイングリッシュ・ブレックファーストに４人分を変えてもらうことで話をつけた。私に付き添って来てくれた加納恵美子さんがあきれている。
「何を言い出すのかと思ったけれど、結構やるわねえ。」
そして、続けて、「でも、どうせなら６人分ランクアップしてほしいわよね」
なるほど、6 人いるのだから 4 人分だけランクアップと
いうのもなんだか面倒だ。ダメもとで掛け合ってみよう
と、また二人でフロントに引き返した。
「さっきは 4 人と言いましたが、私たちは 6 人いますので、6 人分をイングリッシュ・ブレックファーストにしていただけませんか？」
「でも、替えてほしい部屋は 2 部屋で 4 人なのでしょ？
あとの 2 人はそのままでいいのですよね。それなら、やはり、4 人分ということになります」
そう言われると、ごもっともだ。すごすごと引き下がるしかなかった。
　不思議なことに、この後、２ヶ所のホテルで６名が一緒に泊まったのだが、ツインを３部屋予約したのに、いつでも１つの部屋だけが他の２部屋より広かった。そこで、自然にその広い部屋がミーティング用になった。

**ホテルから見渡したテムズ川の景観**

ようやく荷物を置くと、さっそく散歩に出た。ホテルの前の通りには小さな店舗やレストランが立ち並んでいる。ごく庶民的で質素な感じの店が多い。通りを曲がって住宅地を抜けると目の前に大きな美しい橋が現れた。ハマースミス橋だ。橋の上から眺めるテムズ河は大きく蛇行していて、向こうの水面には小さなカヌーが２隻、レースの練習をしているのか、競いあっている。掛け声や歓声が風に乗って聞こえてくる。岸辺のパブではオープンデッキで人々が賑やかに一杯やっている。その笑いがこちらにも伝わってくるようで、なんとも愉快になってくる。テムズ河のほとりに広がった住宅地は、ブロックごとに家の外観の色はすべて統一されている。うすいベージュの壁面に窓やドアには濃い茶色で縁取りしてあって、まるでヘンゼルとグレーテルの「お菓子の家」みたいだ。「可愛い！」「綺麗ねえ」とみんな写真を取りまくっている。

気がつくとすでに夜の９時前だ。空はまだ昼間みたいに明るいので、そんな時間になっていることに気づかないで、２時間も歩き回っていたことになる。そろそろ夕食にしよう。ホテルに戻ると一番広い部屋に６名が集合して、さっき街で買ったサンドイッチの包みをあけた。

まずは黒ビールで乾杯！

日本を出てから、長い長い１日だった。

## ◆6月30日◆

ロンドンでは基本的に昼間は自由行動にして、夕方に全員がどこかで落ち合い、一緒に夕食を取ることにした。

しかし、この日は全員が科学博物館見学を希望したので、朝、みんなで繰りだした。レーベンスコートパーク駅で「ウィークエンド・トラベルカード」を買った。価格は６ポンド（約 1000 円）。これで土・日の 2 日間、ロンドンの地下鉄とバスが乗り放題になる。安くてお得なのも嬉しいが、いちいち切符を買わなくても済むのがなんとも有り難い。

サウスケンジントンで下車し、科学博物館の開館までまだ時間があるので、5 年前に瀬川さんが住んでいたアパートのそばを通りすぎ、ハイドパークまで行った。緑が美しい。まさに都会のオアシス……と思っていると、目の前に金ピカに輝く巨大な像が現れた。ヴィ

クトリア女王の夫のアルバート公の記念碑だ。見上げると首が疲れるほどの巨像で、しかも異様なほどキンキラキンなので笑ってしまった。権力や財力の表し方があまりにもストレートすぎて滑稽に思える。向かいには美しいロイヤル・アルバートホールが見える。アルバート公は、1851 年に議会の反対を押し切って世界ではじめての万国博覧会を開催し、その収益をこのホールや周辺の博物館や学校の施設に投じたそうだ。アルバートホールに立ち寄ると、午後６時半からゴスペルコンサートが開かれるとのこと。しかも一番安い５ポンド（900 円）の席ならまだ空きがあるという。ロイヤル・アルバートホールでコンサートが聴けるなんて願ってもないと、全員一致でチケットを買った。指定席で続き番号なので、「夕方にまた、ここで会いましょう」と各自 1 枚ずつ渡した。さあ、もう 10 時。科学博物館が開館する時間だ。

**なんと、臓器移植された人の不要になった臓器が展示！**

地下１階から地上６階建て。科学博物館はとにかく広い！　185１年に開催されて大成功をおさめた世界初の万国博覧会の出展物を展示するために翌年作られたのだそうだが、現在の建物になったのは1977年と比較的新しい。１階には動力エンジン、宇宙開発コーナー、IMAX の３Ｄシネマ（これは別料金が必要）、２階は農業、通信、天文学、Who am I?コーナー、３階は印刷、コンピューター、原子力、４階は飛行、映像、未来コーナー、５・６階は医学、薬学などの展示がある。駆け足でまわったとしてもすべてを周るのにはおそらく３日は必要だろう。私は上田さんと瀬川さんと一緒に開館から閉館（午後６時）まで館内を精力的に歩きまわったが、だんだんと時間が押してきて、最後の３０分間は３人で競歩をしているみたいに必死になった。特に印象に残っているものをあげると、産業革命時に作られ使われていた動力エンジン類（これらはとても美しかった）。大気圏を突破して帰還したアポロ１０号のカプセル。初期のコンピューターの数々。昔の薬草の数々。ペットボトルのロケット（これは実験授業で子ども達に大人気だった）。触れると音や光が出て素敵な音楽が作れる電子パネル。医学（麻酔のなかった頃の治療から最先端医療まで）や獣医学（動物を殺す道具の展示などもあった）などだ。それにしても上田さんと瀬川さんの解説つきで博物館をまわることの楽しさったらない。二人とも知識の泉みたいな人たちで、展示の前に二人が立つとアカデミックな話しがどんどんと飛び交い、まるで漫才の掛け合いみたいで実に面白い。

５時５０分になると、建物の奥のほうから順番に「閉館でーす」と係員が声を張り上げて、人を追い出しにかかる。とてつもなく広い博物館の中にいる大勢の人々を６時には残らず外に出さなくてはならないらしく、「閉館まであと１０分ある。もうひとつだけ見よう」と右往左往する人たちを大声で押しとどめ、出口に向かって追いたてている。日本の博物館だと閉館時間前になるとそれと分かる音楽が流れ、出口で係員の人たちが「本日は、ありがとうございました」と送り出してくれたりするが、「早く出てって！」といわんばかりのロンドン式は、これまた、なんとストレートなんだろうと驚いてしまった。それでも、私は出口に向かう途中で、追いたてまわされながらも絵葉書を数枚買った。

６時すぎ、ロイヤル・アルバートホールに行くと、加納さんと黒木さんがすでに来ていた。二人は科学博物館を途中で切り上げ、近くにあるヴィクトリア＆アルバート博物館を見てきたのだそうだ。しばらくして重松さんも現れた。彼女はひとりで科学博物館のとなりの自然史博物館をまわったそうだ。それぞれに博物館を堪能したわけだ。ロイヤルアルバートホールの中はすり鉢状になっていて底に舞台があるという感じで、観客は舞台をまわりから見下ろす形になっている。私たちの席は最上部で歌舞伎でいう「大向こう」に当たる席だ。ステージまでの距離は遠いが、全体はよく見渡せた。この日のコンサートはオーストラリアの楽団とコーラスによるゴスペルだった。メンバーは全員が白人で、ゴスペルというより、歌とダンスのついたマーチングバンドって感じだった。

**ロイヤル・アルバートホールの前景**

6 時 30 分開始で途中で 1 回インターミッションが入り、終わったのが 9 時すぎだった。それでも外に出ると、まだ明るい。サウスケンジントン駅の近くの下町風のイタリアンレストランに入って、パスタとサラダを頼んだら、うどんみたいなふにゃふにゃのスパゲティーと野菜をたださくざくと切ってボールに入れただけの「うさぎの餌」みたいなサラダが出てきた。こんなものをお客によく出すなあとあきれるばかり。6 人で 44.5 ポンド（約 8 千円）。それだって高いくらいなのに、「チップは料金の 1 割くらい置くのよね」と私たちは律儀に小銭を出し合った。

## ◆7 月 1 日◆

土曜講座の電磁波プロジェクトメンバーである上田さんと瀬川さんと私には、今回のツアーでひとつの課題が課されていた。イギリスの電磁波問題の現状を知るために現地のNPO と会うことだった。ガウスネットワークの懸樋哲夫さんからは現地の NPO であるパワーウォッチの住所をもらった。しかし電話番号もメールアドレスも書いてない。手紙を郵便で送る手もあるが、果たしてすぐに返事がくるかどうか定かでない。住所をよくみると、どうもケンブリッジの近くらしい。そこで、FAX ナンバーの分かっていたケンブリッジのツーリストオフィスに用件を FAX で送った。大成功！翌日にはパワーウォッチの電話番号が FAX で送られてきた。お陰でその日のうちに代表のアラスダー・フィリップス氏をつかまえることが出来た。土曜講座の電磁波プロジェクトの活動を話すと大いに興味を示され、会いたいとおっしゃった。

問題は日程だった。私たちがイギリスに行く頃は超多忙なのだという。とにかくメールでやりとりをしようということになった。フィリップスさんはもともとジャーナリストで、電磁波関連の訴訟の調査をしたのをきっかけにパワーウォッチの活動に関わられ今は代表として活躍されている。その後のメールのやりとりで、私たちはすっかり仲良くなり、彼はジャーナリストらしく次々とホットなニュースを送ってくれた。ちょうど私たちがイギリスを訪問する 6 月後半には、ロンドンでテレビ局も巻き込んでの大キャンペーンをはるということだった。それが 6 月 30 日に終わり、31 日にはケンブリッジで息子さんの結婚式があるという。もし会えるとしたら、7 月 1 日しかないけれど、その日になってみないと分からない。「とにかく 7 月 1 日の朝ホテルに電話を入れるよ。」ということだった。

7 月 1 日の朝、加納さんと黒木さんはまずロンドン塔へ行くと言って早々と出かけてしまった。この二人はなんとなく野次喜多風で元気いっぱいの楽しいコンビだ。大学院生の重松真由美さんはわが道を行くというタイプで、自分の興味のある所にひとりでどんどんと出かける、たくましい行動力の持ち主だ。この日はロンドンの東の端にあるグリニッジに出かけた後、反対の端にあるウィンブルドンまで足を延ばすという。ちょうどその頃ウィンブルドンではテニスの試合が繰り広げられていたのだが、真由美さんの興味はテニスではなく、水車なのだそうだ。後に残った３人はひたすらフィリップス氏の電話を待っていた。9 時 30 分頃、待望の電話がかかってきた。なんと 2 時 15 分に私たちのホテルまで来てくれると言う。3 人はにわかに色めきたった。

2 時 15 分までに私はしておきたいことがあった。7 月 3 日のコヴェントリー行きのコーチ(バス)の予約と 4 日の宿の予約だった。上田さんと瀬川さんも付き合ってくれるというので、3 人でヴィクトリアのコーチステーションに出かけた。ところが、同じように予約を取る人たちがつめかけ長蛇の列をなしていた。これがイギリス名物のキューってやつだ。しかたない。並ぶしかない。と私は覚悟を決めて最後尾に並んだ。並んだ後からさらにどんどん人が並んで、あっという間に最後尾がはるか後ろになってしまった。上田さんはこういうキューは大の苦手らしくげんなりしている。そこで、上田さんと瀬川さんには駅周辺をひとまわりして最後の日のロンドンの宿の情報などを仕入れてきてもらうことにした。2 時間待ちくらいに思えた長い列も予約窓口がたくさんあるのでどんどんとはけていった。40 分くらいで番がまわってきて、希望通りの時間で 6 人分の往復のチケットの予約が取れた。イギリスではどういうわけか片道料金と往復料金がさほど変わらないようになっている。私は当初は最後にロンドンに戻らず、オックスフォードに滞在しようかと思っていた。

しかし、それではロンドン・コヴェントリー間とコヴェントリー・オックスフォード間のチケットをどちらも片道だけ買うことになり、不経済なのでやめたのだ。

ちょうど上田さんと瀬川さんも一回りして戻ってきた。まだ 11 時 30 分だ。カフェでお茶を飲みながら、フィリップス氏との会見の打ち合わせをすることにした。私はミルクティーを頼んだ。温められたカップにポット入りの紅茶、それに冷たい牛乳が運ばれてきた。牛乳は温めると風味が落ちるので、冷たいほうがよいのだ。とても美味しい！どうしてこんなに美味しい紅茶が入れられるのに、食べ物はまずいのだろう。そんなことを思っているうちに、上田さんがパソコンを取りだし、打ち合わせが始まる。懸樋さんからフィリップスさんにたくさんの質問を今回預かってきている。上田さんはそれらを行きの飛行機の中で英訳したのだという。さすがだ！こうして 3 人で打ち合わせをしていると、いつもの土曜講座の運営会議の雰囲気になってくる。電磁波プロジェクトがどうのこうのと、つい熱中して声が高くなり、ふとまわりを見わたすと「あ、ここはロンドンなんだ」と気がつく。それがなんとも心地よかった。

1 時がすぎ、ヴィクトリア駅に行く途中で、ウェールズのホテルの予約を入れなくてはならないことを思い出し、上田さんと瀬川さんに本屋で待っていてもらって、私は公衆電話をかけにいった。ヴィクトリアの駅は 10 年前の子連れ旅行でよく利用したところだ。色とりどりのゼリー（日本ではグミと呼んでいるお菓子）を量り売りしてくれる店が構内にあって、「蜘蛛そっくりのグミ」とか「がいこつ型のグミ」など結構グロテスクなものもあった。もうその店は見当たらなかったけれど、大きなドーム型の構内の雰囲気はなつかしかった。テレフォンカードを買い、公衆電話をかけようとしたが、何度か失敗した。イギリスの公衆電話のタイプはいくつかあって、日本と同様に受話器を取ってからカードをいれてダイヤルする機種、カードをいれてから受話器を取る機種などがある。壁掛け式の電話をいくつかのタイプ試してみるがつながらない。2 メートル先くらいにクレープの屋台があり、そこのおにいさんに、

「すみません。電話のかけ方が分からないんです」と言うと、「どれどれ」とやってきて、試してくれるが、やはりつながらない。いくつかの電話で試してもだめ。「電話が壊れてるのかしら？」と言うと、「違うね。このテレフォンカードが腐ってるんだ」

（英語で腐ってると言ったわけではないけれど、）

「そんなことないわ。今そこで買ったばかりよ」

「すぐに行って、文句いいなよ。お金返してもらったほうがいいよ」

うそーっ！とおもいながら、カードを買った雑貨屋へ。「今さっきこれを買ったんですけれど、壊れてます！」今度はその店のおにいさんが、「どれどれ」とレジを放り出して、30 メートル先の公衆電話まで来てくれる。さっきのクレープ屋のおにいさんもまたやって来て、見物している。1 度目は失敗。2 度目にやっとかかった。

そんなこんなで用事がすむと 1 時半を過ぎてしまった。急いで二人の待っている本屋に引き返し、地下鉄に乗った。わりとすいていて、それぞれが少し離れた空席に座った。3 人ともぼーっとしていた。しばらくして瀬川さんが、その電車が違った方向に走っていることに気がついた。慌てて下りて引き返す。もう 2 時を過ぎている。ようやくレイベンスコートパーク駅に着き、走ってホテルに戻った。2 時 15 分ジャスト！イギリスにしては猛暑の日で、汗びっしょりになってしまったが、なんとか間に合った。フィリップスさんはま

だだ。フロントで待っていると、10 分ほど遅れて、フィリップス氏登場。大きなバックを肩にかけ彼も大汗をかいている。

「レイコ！　君が教えてくれたホテルの番地は間違って
いたよ。お陰で違うブロックを 10 分も探し回ってしま
たよ」

まったく何ていう日だろう。運がいいのか悪いのか！？昨日、息子さんが結婚したというのだから、青年とはいえない年齢だと思うのだけれど、フィリップスさんはまるで青年みたいに若々しく、ウィンブルドンのテニスコートに立たせたら似合うだろうなと思わせる、いかにもスポーツマンって感じの人だった。会った瞬間からすっと打ち解ける親しみと温かさを持っている。さっそく上田さんが電磁波プロジェクトで測定した東京タワーの周辺の電磁波のグラフを見せると、しばらくじーっと眺めた後で、「これはたしかにすごく興味ふかいね」

この会見に関しては上田さんが詳しく報告されている（本号８ページ参照)。2 時間以上に及ぶ熱のこもった楽しい会見が終わると、フィリップスさんは颯爽とかっこよく去っていった。渡しそびれた資料を渡そうと瀬川さんがすぐ後を追ったが、あっという間に駅の中に消えてしまったそうだ。ケンブリッジのさらに先の町からロンドンまで 2 時間以上かけて私たちに会うためにやって来てくださったフィリップスさんの人柄に私たちはほれ込んでしまった。

午後 4 時半。さあ、私たちも行動開始だ。瀬川さんがお勧めのロンドン交通博物館に出かけることにした。地下鉄でコヴェントガーデンに出る。あちこちに大道芸人が繰り出してそのまわりに人垣ができている。いまにもマイフェア・レディのイライザが登場しそうだ。きょろきょろと周りを見ながらも、早足でどんどん歩く瀬川さんを見失わないように頑張ってついていった。交通博物館に着いたら 5 時だった。6 時が閉館なので 1 時間しか時間がないが、そう広くもないから一通りは周れるだろうとのこと。中に入ると、所狭しとダブルデッカーが並んでいて、バスの発着所の趣きだ。どれもよく似ているけれど、少しずつ違う。驚いたことに最初のダブルデッカーは馬車なのだ。2 階建ての真っ赤な車体はバスそっくりだが、バスではない。そうか、1８世紀のロンドンには、2 階建てのまっ赤な乗合い馬車が走っていたのか。

**ロンドン交通博物館にて**

6時に博物館を出て、コヴェントガーデンを一回りして、トラファルガー広場にでる。観光スポットはどこもにぎわっている。この日は 7 時にチェルシーで他の人たちと合流することになっていた。ガイドブックにお手頃価格でボリューム満点と載っていたレストラン「チェルシー・キッチン」に着くと、ちょうど他の人たちも今着いたばかりだという。さっそくビールを頼んで、乾杯すると加納恵美子さんが話し始める。
「黒木さんはすごいの！びっくりしたわ」
と言いながら加納さんも黒木さんも笑い転げている。

加納さんはご主人の仕事の関係で毎年夏はアメリカで過ごされているので英語は大のお得意だ。黒木さんは英語は苦手なので、すべて日本語で押し通す。ところが、黒木さんの日本語がどこに行っても通じるのだと言う。デパートに出かけて、息子さん用にと 26・5センチのスニーカーを買うのに、日本語の全く通じない店員さん相手にすべて日本語で話して、ちゃんと 26・5 センチの靴を手に入れたというから、そりゃあ、やっぱりすごい！

これはこの夜のテーブルでの最大のヒットだった。重松さんは、ウィンブルドンで水車を見るために乗ったバスが反対方向だったという。人に聞いたり、地図を見ながら、ずいぶん遠回りをしてやっとの思いでたどり着いたのだそうだ。これまた、大したものだ。こういう経験は誰にでもあって、(実際私たち 3 人もその日同じような目に遭っているし・・・)そういう体験こそ後になってなつかしく思い出すものだ。ガイドがついて、日本語でぺらぺらと説明してくれるようなツアーなどでは決して得られない旅の楽しさがそこにある。さて、チェルシー・キッチンは、確かにボリューム満点でその割りにはそれほど高くなかった。ガイドブックは正しかった。「おいしい」なんて一言も書いてなかった。その通りだ。

この日の最後の笑い話は、チェルシーからハマースミスまで帰る時の話し。私たちはウィークエンド・トラベルカードでさんざん地下鉄を乗り回したけれど、このカードはバスにも使えるのだ。そうだ。バスに乗ってみよう！ということになった。ところが、時刻表の時間が過ぎても、他のバスは予定通り来るのに、ハマースミス行きだけは待てど暮らせど来ない。待ちきれずにもう地下鉄にしようと思いかけた時、ものすごく遅れて、ようやく来た。よかった、よかったと思って乗り込んで、バスが発車して驚いた。信じられない猛スピードで飛ばすのだ。まるでパトカーに追いかけられて逃走中の犯人の車みたいに、運転手は決死の表情で（本当は後姿しか見えなかったけれど、顔はきっとひきつっていたに違いない）命がけでハンドルにしがみついてびゅんびゅんと飛ばす。目の前の信号が赤だと急停車するが、止まっている間にはバスは激しく上下に震動する。みんなの頬の肉がぶるぶると震えているのが可笑しくて、黒木さんと二人で死にそうになりながら笑いころげた。笑いがとまらなくなった人以外は、恐怖で凝り固まっている。加納さんは内心、この運ちゃんはきっとヤクをやっているのだと思ったという。この調子でいくと、ハマースミスに着くまでに、人の１人や２人、車の４・５台もなぎ倒すのではないかという不安がよぎった。そういう事故にだけは遭いたくない。お願いだから早く着いてと祈るばかりだった。ハマースミスにようやく着いた時、私はすっかり笑い疲れて、ぼろ雑巾みたいにしわしわになっていた。

## ◆7月2日（火）◆

ロンドン滞在も４日目を迎えた。翌日にはコヴェントリーに発つから、ロンドンをゆっくりまわれるのはその日が最後だ。朝食を済ませるとすぐに全員で出発した。ホテルからレーベンスコートパーク駅に向かう道ももうすっかりおなじみだ。角の新聞屋の外には毎朝たくさんの男たちがたむろしている。外壁に貼り付けてある求人ビラに目を通すためだ。今年 6 月にはトニー・ブレアが再選され、景気回復の兆しが見えてきているイギリスだが、ロンドン郊外の住宅地で目にするこの光景は、この国の失業率の高さを生々しく物語っている。今春日本に改革旋風を巻き起こして登場した小泉首相が、ちょうどその日イギリス入りしていて、大きな顔写真が朝刊の一面を飾っていた。

駅から電車に乗り込む時、10 人ほどの子どもの一団と一緒になった。女の子も男の子もブルー系でコーディネートされた制服を着て、数人の大人が引率している。私の隣に座った 2 人の男の子に声をかけると、むじゃきに自分たちのことを話し始めた。くりくりとした目を輝かせて話す姿は天使のような可愛さだ。年齢は６歳。好きな漫画は×××、好きなテレビは×××、好きな石鹸は×××、この石鹸はトニー・ブレアも使ってるんだ……。

「トニー・ブレア？」思わず聞き返すと、

「そう。僕たちのプレジデントだよ」

得意げに教えてくれた。

瀬川さんに促されて、朝刊の 1 面の顔写真を指差し、

「この人は誰だか知っている？」と聞いてみる。

「知らない」

「ジュンイチロウ・コイズミ。日本の首相よ」

お返しに教えてあげた。

この日はまずアールズコートに出て、７月７日の宿探しをした。最後の足場として使うだけなので、とにかく安いことと駅から近いことが決め手だ。改札を出るとロンドンの下町の典型的な白い長屋風建物が続き、さっそく「ホテル」と看板が出ている。入口を入ると宿の主人がいた。ツインが 55 ポンド（約 10000 円）と安い。部屋を見せてと言うと、3 階の部屋のキーをポンとよこして「見て来い」と言う。ところがリフト（エレベーター）がない。これでは失格だった。

隣りは新聞に「ツイン１泊 49 ポンド」と出ていたラムシーズホテルだった。宿の主人がツインは 55 ポンドと言うので、新聞を取り出す。

「ここに 49 ポンドと書いてある」

「ああ、その部屋は空いてない」

実にそっけない。ともかく部屋を見せてもらう。ものすごく狭いが、カーテンと壁紙が花柄で統一され、こざっぱりはしている。簡易シャワーもついているし、リフトもある。ぎりぎりの合格というところか。

もう 1 軒、向かいのホテルに入った。玄関にはラウンジがあり雰囲気はよいが、なんとツインが 100 ポンドだという。高すぎるわと言うと、88 ポンドの部屋もあるとボーイが案内してくれた。しかし、その部屋の狭さときたら、前の２つとちっとも変わらない。それなら安いほうが良いわけで、結局２番目のラムシーズホテルに決めた。無愛想な主人に現金で全額を前払いと言われ、３部屋分を払って無事予約が完了した。

再び地下鉄に乗り、次なる目的地の大英博物館に向かった。ロンドンに来て、ここを見

ない手はない。とても一日では見切れないのは分かっているだけに、どこに狙いを定めるかが勝負だ。エントランスを入る前にみんなで記念写真を撮り、「いざ討ち入り！」という気分で巨大な建物に突入した。まず、全館案内のパンフレットを買い、最初にエジプトの部屋に入ると、目の前にロゼッタストーンがあった。びっしりと書き込まれた象形文字。まるで巨大なノートみたいだ。その向こうには古代エジプト人の像とか神秘的な猫の像などが延々と並んでいる。こういう部屋が 90 もあると思うと、気が遠くなりそうだった。重松真由美さんがせっかく買ったパンフレットを雑踏の中で落としてしまった。歩いたところを探していた真由美さんは、今度は「クレオパトラ展」の入場券を拾った。膨大なコレクションに目を奪われて、手に持っている物を落とす人も多いのだろう。

大英博物館の入館料はなんと無料なのだ。しかし、特別展である「クレオパトラ展」は有料だった。常設展示のあまりの膨大さに食傷気味の私は、その時にしか見られない「クレオパトラ展」をじっくりと見るのも良さそうだと思った。入場券は 7 ポンドだった。中に入ると冷房がよく効いていて、熱気にやられた頭には心地よかった。四角い部屋いっぱいに展示物があっちにもこっちにも並んでいて、どこからどう見たらいいものやら戸惑ってしまう。イヤホンを耳につけてオーディオガイドを熱心に聞いている人たちを見て、私も借りてみようと入口に戻った。イヤホンを借りる為には貸し出し料の 3 ポンドと身分証明書が必要で、パスポートを出すと、若くて美しい受付嬢は小さな紙切れに引き換え番号を書いて渡すなり、私のパスポートを無造作に机の引き出しに放り込んだ。私は心配になって尋ねた。

「もし、私がこの券を落とし、それを誰かが拾ってもってきたら、私のパスポートをその人に渡しますか？」

「いいえ、渡さないわ」と受付嬢がにこやかに答えたので、安心して中に入り、スイッチを押すと、「ジャーン、これからあなたを古代エジプトの世界にご案内します」とオーディオガイドツアーが始まった。数歩歩いたところで突然、「振り返ってください。豪華なタペストリーが見えるでしょう」と言われて振り返るが、それらしきものはない。イギリス人と私では歩幅が違うのだろうと振り出しに戻り、今度は大またで歩いてみる。「振り返ってください」で振り返るが見当たらない。おかしいなあと周りを見た。もしそのガイドに従うとすると、ある地点に来たら皆いっせいに振り返るはずではないか。しかし、そんなことをしている人は誰もいない、私以外は。英語を勉強して出直したほうがよかった。

**大英博物館にて**

おもしろかったのは、絶世の美女として有名なクレオパトラは実はそれほど美人ではなかったらしいという説で、それを裏付ける美しくない肖像画などが展示されていた。10 ポンドも払ったのに、「クレオパトラ展」はいまいちインパクトに欠け、おまけに冷房の効き過ぎで持病の腰痛まで出てきてしまい、さっさと見切りをつけて入り口付近の休憩所に行くと、ちょうど上田さんと瀬川さんがランチを食べ終わったところで、広い博物館の中のいくつかの見どころを私に簡単に教えると意気揚々と行ってしまった。オーディオガイドより、やはりこの博物館コンビの後をついて歩くべきだったと後悔したが遅かった。私は飲み物を買い、バッグからりんごとクロワッサンとチーズを取り出して食べ始めた。これらは朝食の時にバッグに入れておいた。黒木さんも重松さんもやってきた。しばらくして加納さんもやってきた。加納さんはひとりでウェストミンスター寺院まで行って来たそうだ。みんな元気だった。

**大英博物館のミイラ展示**

午後から見たものの中で圧巻だったのは、裸のミイラだった。ミイラはたいがいぐるぐる巻きの包帯をまとっていて、棒鱈（ぼうだら）みたいに硬直して横たわっているものだが、このミイラは横向きになって手足を折りたたんで眠っている。自然界の条件が偶然にもミイラ作りに絶妙にマッチして、奇跡的に出来あがった自然体のミイラなのだ。指の 1 本 1 本まで生々しく、「そんなところで裸で寝ていたら風邪ひきますよ」と声をかけたくなる。少し前、ミイラになったら生き返ると信じて、肉親の死体をそのまま放置する人たちのグループが日本で問題になったが、もし今このミイラが目をさまして、自分が大英博物館のショーケースの中で裸で横たわっていることに気づいたら、さぞかし困惑するだろう。

日本展もやっていた。ひとつは「富士百景」で、北斎と広重の本物がずらりと並んでいて見ごたえがあった。別の部屋では「日本のおみやげ展」をやっていて、浅草で売っている根付けだとか、日本各地の「ナントカ饅頭」とか「ドコソコ煎餅」などがごちゃごちゃと集めてあった。プリクラの機械も置いてあり、向こうの人たちが珍しそうに機械を操作して自分のプリクラを作成しては喜んでいた。ここが大英博物館とはとても思えない一角だった。

2 時半に女性 4 人は売店の前に集合して博物館を出た。次なる目的地はロンドンの西にあるキューガーデンだった。地下鉄に乗り、ホテルのあるレーベンスコートパークを通りすぎ、さらにテムズ河をさかのぼったところにある広大な植物園だ。駅前からはたっぷりと

葉をつけた涼しげな並木道が続いている。なんとも美しい町だ。キューガーデンには地球上の全植物種の 10 分の１が植えられているというから驚きである。そればかりではない。地球上の全植物種の種を収集する運動を展開しているそうだ。絶滅を予想される植物の種もここで保管されることになる。ここでも日本展をやっているらしく、園内のあちこちに日本の鯉のぼりが、5 月でもないのにゆったりと泳いでいた。果てしなく広い園内を歩き疲れた私たちは草の上に腰をおろした。黒木さんがひとりひとりにウェットティッシュを投げる。それを上手にキャッチすると、今度はお煎餅が飛んでくる。互いに 2、3 メートルしか離れていないのだが、腰をあげたり手をのばしたりするのが億劫で、みんな声を掛け合いながら飴やチョコレートを投げたり取ったりしあった。それから、みんなで仰向きに寝転んで、高い空を眺めながら、いろんなことを語り合った。

**テムズ河からみたウェストミンスター寺院**

6 時すぎにテムズ河の船着場、キュー・ピアで上田さんと瀬川さんと待ち合わせをしていた。二人は大英博物館を切り上げた後、ぎりぎりまで古本屋街にいたそうだ。6 時半に船に乗り、1 階のデッキにそれぞれ分かれて腰をおろした。船はキュー・ピアからウェストミンスターまでたっぷりと 2 時間かけてテムズ河を下ってゆく。河辺の家の庭で遊んでいた子ども達が私たちの船を見つけるといっせいに手を振りはじめた。私たちも手を振って応える。教会の塔が見える。河へりを青年が自転車で走っている。しばらくしてハマースミス橋が見えてきた。4 日前にこの橋の上から眺めた景色が思い出される。地下のキャビンで加納さんと重松さんが買ってきた缶ビールとポテトチップスをお裾分けしてもらって、一杯やりながら風に吹かれた。2 時間の船旅も終わりに近づくと、倉庫や煙突の立ち並ぶ地帯に入った。観光客は足を踏み入れることもないロンドンの裏側の顔だ。やがて最終地点となるウェストミンスターの船着場が迫ってきた。締めくくりを飾るのはロンドンのシンボル、国会議事堂だった。正式にはウェストミンスター宮殿とよばれるこのゴシック式の建物は、全長 300 メートル、部屋数 1100 という堂々たる風格で、手前には天に向かってりりしくそびえ立つビクトリアタワーを、その後には惚れ惚れとするほど美しいビッグベンをしたがえて、スローモーションフィルムのようにゆっくりとゆっくりと近づいてくる。私の心の中ではエルガーの「威風堂々」が流れはじめた。

船を下りると 8 時半だった。ビッグベンの鐘の音が当たり一面に響いている。さて、夕食はどうしようということになった。私はちょっとためらいながら提案した。

「今日の夕飯はホテルの部屋で簡単に済ませ、その後、ホテルのそばのパブに繰り出すのはどう？」

みんなが賛成したので、地下鉄でいっきにレーベンスコートパークまで戻った。ホテルに着くと、それぞれの部屋で湯沸しポットで沸かした湯を持ち寄って、一番広い部屋に集まった。私は 9 種類のミニカップ麺を胃が疲れた日の為の特効食として持参していた。重松さんもミニチキンラーメンを持ってきていたので、6 人分の夕食はそれで充分だった。

このカップ麺パーティーは好評だった。湯を沸かす人、注ぐ人、蓋の重しを探す人、3 分間を測る人、それぞれが自分の持ち場を守りながら、待ち遠しくてたまらない。ようやく 3 分が経ち、おあずけが解かれた人から、フーフーと言いながら麺をすすりあげる。「ああ、おいしい！」本当にカップ麺は海外で食べるに限る。

ひとごこち着いて、ホテルの隣りのパブに繰り出した。ここならサンダル履きでぶらりと出かけて、一杯飲んで帰ってこられる。店に入るとテーブル席に腰を下ろしビールを頼んだ。カウンターで地元の人たちが数人楽しそうに飲んでいる他には客はいない。店の中央には定番のようにビリヤード台があり、壁にはダーツの的があった。まさにロンドン最後の夜を飾るにはぴったりのしつらえだった。

## ◆7 月 3 日（水）◆

コヴェントリー行きのバスは、ヴィクトリアのコーチ・ステーションから 11 時 30 分に出る予定だった。久しぶりに持つスーツケースの重さと地下鉄の万一のダイヤの乱れを考慮して、ずいぶん余裕を持ってホテルを出たので、1 時間近く前にステーションに着いてしまった。すでにチケットは買ってあるし、ひたすら出発を待つばかりだった。ところがようやく出発時刻がきたというのに、「コヴェントリー行きは 40 分の遅れです」とアナウンスがあった。しかたがない。待っている間を利用してみんな絵葉書を書き、書いた絵葉書をポストに入れに行き、それを何往復か繰り返していた。私はコヴェントリーの滝さんに電話でバスの遅れを知らせた。

コヴェントリーはロンドンから北西に 200 キロ余り。バーミンガムの手前に位置する工業都市だ。シェークスピアの生誕地として有名なストラトフォード・アポン・エーボンからは車で 30 分ちょっとだ。予定ではヴィクトリア発 11 時 30 分でコヴェントリー着 1 時 40 分だが、40 分遅れで出発したバスは、途中でさらに 20 分遅れ、予定より 1 時間遅れでコヴェントリーに到着した。 バスがコーチステーションに着く直前、道路の向こう側に滝夫妻が見えた。立ち上がって窓越しに手を振ると、こちらに気づいて手を振り近づいてくる。その姿をみると、とうとうやってきたんだという嬉しさがこみ上げてきた。

私と光子さんは知り合って 7 年ほどになるが、その間に彼女が日本にいたのはたった３年ほどだ。最初はニューヨークで、ここ 3 年はイギリスに住んでいる。私たちの付き合いはエアーメールで始まり、そのうちＥメールに代わったが、数え切れないほどの手紙を交わし、時には人生を語りあい、議論をたたかわせ、共感したり、たびたび喧嘩したりして７年が過ぎた。お連れ合いの知則さん（トモさん）は、ばりばりのビジネスマンだったが、

光子さんに感化されて、現在はウォーリック大学の大学院の博士課程で国際関係、おもにアジアにおける女性問題をテーマに勉強されている。二人がコヴェントリーの今の住ま

いに落ち着いてから、「裏庭のバラが綺麗に咲いたのよ。見に来ない？」とか、「とても素敵なマナーハウスを見つけたの。案内するわよ」などという光子さんからのメールが届くたびに、私はイギリスの美しいカントリーサイドの景色を思い浮かべて、ああ、行きたいなあと思いをつのらせた。それがついに実現したのだ。しかも土曜講座のメンバーと一緒に。

スーツケースを彼らの車のほうに運んでいくと、もう 1 台の車のトランクにせっせと荷物を運んでいる男性がいた。私は近づいて手を差し出した。

「あなたがテッドさんね」

「ああ、レイコか。よく来たね」

すでにリタイアして９人ものお孫さんと、その後知ったのだが、3 歳になるひ孫さんまでいるというのに、テッドさんはとてもそんな年齢には見えなかった。イギリス人にしては小柄でスマートで身のこなしも軽く、重いスーツケースをてきぱきと車のトランクに納めてゆく様子はまるで青年のようだった。滝さんのご近所に住んでいるテッドさんは、翌日からの 3 日間、私たちのツアーの運転手を引き受けてくださることになっていて、すでに何度かＥメールで打ち合わせをしていた。

英国は United　Kingdom と呼ばれるように、イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの４つの国が合わさって出来ている。日本では、英国のことは England、「英国風」とか「英国の」という形容詞は English と習うことが多いので、私もこれまで何とも思わず使ってきたが、ウェールズ出身のテッドさんと話すようになってから、私は意識的に England を Britain に、English を British に換えた。

コヴェントリーでは重松真由美さんは滝さん宅に、男性２人はテッドさんの娘さん夫妻の所有しているキャンピングカーに泊めてもらうことになっていた。そこで、黒木さんと加納さんと私の主婦３人組は、ちょっと優雅に滝さんの家の近くのリゾートホテルに泊まることにした。私たちは予約していたホテルでチェックインを済ませると、その夜の滝家でのパーティーの為に、旅行用の服装からちょっとおしゃれな服に着替えて、滝家に向かった。滝さんの家に着くと、日本からそれぞれが分担して運んできた米、醤油、みりん、酒、乾麺、海苔など、光子さんのリクエストの日本食材を差し出した。これらはもちろん滝さんへのおみやげだったが、同時に、我々もご馳走にあずかる料理の材料でもあった。

重松真由美さんの泊まる 2 階の部屋は、普段はトモさんの勉強部屋で、机の向こうには窓越しに庭の木々が見渡せて、朝になると鳥の声で目が覚めるという。上田さんは「こんなところで勉強できたらいいなあ」としきりに羨ましがっていた。大学院生の真由美さんにとって、このホームステイはきっと貴重な体験となるだろう。

**ウォーリック大学構内にある広々とした池のほとりで**

ひと休みしてから、トモさんとテッドさんの車でウォーリック大学の見学に出かけた。車で 10 分ちょっと走るといつのまにかキャンパスの中に入っていた。それらしきゲートもなかったし、道路の幅もまったく変わらず、公共のバスも走っていて、言われなければ大学の中だと気づかないほどだ。ものものしい門構えで町と大学がくっきりと線引きされている日本の大学とは格段の違いだ。広い駐車場に車をとめて、トモさんについてゆくと、時おり本やノートを小脇にかかえた若者たちとすれ違い、ああここはやはり大学なんだと思う。学生たちは肌の色も髪の色も違う。トモさんのガイドで教室、学生会館、コンサートホール、ホテル、学生寮などを次々と見た。これだけでもひとつの小さな町という感じだが、オックスフォードのような伝統の重みを感じさせる重厚さはなく、建物はモダンで明るくキャンパスの中は開放的な雰囲気が溢れていた。さらに奥に進むと、目の前一面にのどかな田園風景が広がった。人ひとりいない静かな森の小道を抜けると小川があり、鴨の一群が戯れていた。私たちを見ると人なつこそうに寄ってくる。トモさんは両手を大きく広げると、ここから見える景色すべてがキャンパスの中なのだと説明した。

6 時になってトモさんとテッドさんは私たちを大学近くのパブで降ろすと、翌日からの私たちのツアーのためのレンタカーを借りに行った。ビールを頼んでほっと一息ついているところに、日本人の母子が声をかけてきた。

「滝光子さんのご友人の方たちと違いますか？」

40 代なかばに見えるその女性は関西の高校の英語教師で、1 年間ウォーリック大学に留学して、もうすぐ日本に帰るのだという。息子は中学 2 年生でイギリスには半年遅れでやってきてこちらの学校に通いはじめたので、半年後に帰国する。二人も今夜の滝家のパーティーに招待されていた。関西弁でひょうひょうと話すフミコさんと、ひょろっと手足の長いコウイチくんが加わって、私たちのテーブルはいっそう楽しくなった。トモさんとテッドさんが戻ってきた。私たちのレンタカーは白い 7 人乗りの新車だった。自動車会社に勤めていて、リタイア後の現在も時々パートでトラックの運転手をしているというテッドさんは車については詳しく、しきりに「いい車だ」と誉めていた。

7 時に滝家に戻ると、台所では光子さんがひとりで奮闘していた。すでにリビングの丸テーブルにはワインやチーズが並べられていた。トモさんが指揮して、リビングから裏庭に出たところにシートを敷き、男性陣が大きなパラソルを設置した。滝家では玄関で靴をぬぐ

ようにしているので、こうして庭にシートを敷いておくと、靴なしでも自由に中と外が行き来できるというわけだ。テーブルの上に光子さんの美しいお手料理が続々と登場した。お得意のチュプチプやクスクスサラダ、それに 3 種類のお寿司（サーモン、卵、アボガド）など。お手製のケーキも 3 種類（ホワイトチョコレート、洋ナシ、ラムレーズン）ある。みんなが感嘆の声をあげているところに、次々とお客様が到着した。

韓国の留学生のチャン夫妻は 11 ヶ月になる娘のソンフォンを連れてやってきた。夫のヨンソンさんはいかにも秀才という感じの笑顔の素敵な方で、いくつもの奨学金を得てイギリスに留学している。気さくな妻のチーさんも留学生だが、今は育児休学中だという。テッドさんが妻のシーラさんと一緒にやってきた。陽気でおおらかなシーラさんは週に何度か徹夜で障害者のヘルパーをしている。テッドさんは甘いものに目がないとみえて、ホワイトチョコレートのケーキにぱくつきながら、外のシートに腰をおろし、中学生のコウイチくんと話している。コウイチくんはこちらに来てからの半年間で英語がめきめきと上達して日常会話には困らない。英語教師をしているお母さんのフミコさんは日本の英語教育の弱点をつくづく感じたという。滝家のお隣りに住むペニー夫妻がやってきた。80 歳を超えた夫のハリーさんはにこにこと物静かで、ひとまわりも年下の快活でおしゃれな妻のレーンさんにしっかりと牛耳られている。なんともほほえましくお似合いのカップルだ。しばらくして、テッドさんの娘夫妻のニコル夫妻が加わった。彼らはテッドさんの隣りに住んでいる。テッドさんの長女であるジャネットさんはなんと 43 歳で 3 歳の孫がいる。夫のアンディさんはバスタブなどを扱っている会社に勤めていて、自宅のバスやリビングを自分で改装するのが得意だ。明るくてスポーティーな二人の趣味はキャンピングカーであちこちを旅行することだそうで、庭にはご自慢のキャンピングカーが置いてあった。今回、そこを上田さんと瀬川さんに提供してくださったのだが、ツインベットにトイレやシャワーやキッチンが完備されていて、ホテル並の快適さだったそうだ。

**滝さん宅にてホームパーティーが始まる**

滝家でのホームパーティーは大人 18 人と赤ん坊 1 人がわいわいと集い、最高に楽しかった。美味しいお料理を食べ、ワインを楽しみ、おしゃべりに夢中になり、ジョークを言いあって笑い、その雰囲気はまさに土曜講座のパーティーそっくりだった。9 時 30 分を過ぎると、「とても楽しかったわ」「みなさま、よいご旅行を！」などと挨拶をして、一組一組去っていき、10 時すぎには滝夫妻と私たち 6 人だけが残った。私たちのためにこんな素敵なホームパーティーを開いてくださった光子さんとトモさんに私たちは心から感謝した。

少しは後片付けを手伝うという私たちに「あなた達は明日もまたハードなのだから……」と二人は言い、光子さんが主婦 3 人組を車でホテルまで送ってくれることになった。裏庭のガレージから出た車が、暗くて細い路地をゆっくりと通り抜ける時、フロントグラス越しにまるでピーターパンかメリーポピンズの物語にでも出てきそうな赤い大きな月が、夜空にぽっかりと浮かんでいるのが見えた。

## ◆7 月 4 日（水）◆

コヴェントリーで主婦 3 人組が泊まることになったビレッジホテルは、滝さんの家から車で５分ほどのところにあり、テッドさんが以前勤めていた自動車会社の所有地を買いとって２年前にオープンした会員制レジャークラブ付きのホテルだった。６月はじめに予約のＥメールを入れると、支配人から「あいにく当ホテルにはトリプルルームはありません」と返事が届いた。「そこを何とか……」とくいさがって、私たちは夫婦と小さな子どもが泊まるファミリールームに泊めてもらえることになった。「当方は日本人女性で、身の丈はイギリス人の 10 歳並みですから、子ども用ベッドで充分です」という私の手紙が効いたらしい。そんなわけで、ベッドは上・中・下と明らかに 3 段階の落差があった。「上」はフカフカのダブルベッド、「中」は狭くて硬いソファーベッド、「下」はソファーベッドの下部に納まっている引き出しで、まるで蚕棚のような粗末さだった。幸い私たちはウェールズの旅行から帰ってきた後も 2 日間ここで泊まることになっていたから、平等に 1 泊ずつ豪華なダブルベッドを楽しむことができた。黒木さんが「私は下からだんだん上に上がっていくのがいいわ」と、まず初日は「下」を選んだ。加納さんは「では私は「上」からいってみる」というわけで、ベッドの順番はわけもなく決まった。私は「中」「上」「下」と、最後がどん底で終わるめぐり合わせだ。

それ以外には申し分のないホテルだった。宿泊者の特典としてレジャークラブのゴールデンメンバーズカードが使えたし、朝食は優雅なダイニングルームで素晴らしいイングリッシュブレックファーストが出た。しかも 1 泊税込みで 88 ポンド（約 16000 円）、連泊の場合は 55 ポンド（約 10000 円）だった。これは 1 部屋 3 人分の値段である。

朝 6 時 30 分､私たちは水着に着替えると地下のレジャークラブに出かけてみた｡プール、サウナ、スパなどの他にエアロビクス、サーキットトレーニング、フィットネスのスタジオがある。朝早くからトレーニングウェアに身を包みスポーツバッグを肩にかけたメンバーたちが颯爽とやってくる。出勤前にちょっとひと泳ぎというビジネスマンらしき人もいる。私たちはプールで泳いだり、サウナやスチームルームやスパに入って 30 分ほど過ごした。

朝食を食べ終えてロビーで待っていると、約束の 8 時 30 分きっかりにテッドさんが迎えにきた。外のレンタカーには上田さん、瀬川さん、重松さんが乗りこんでいた。7 人乗りの車は、前列に 2 人、中列に 3 人、後部座席に 2 人座れる。運転席に座るとテッドさんはみんなに聞こえるように大きな声で尋ねた。

「みんな、昨晩はよく眠れたかい？」

私たちは声を合わせて「Yes！」と答えた。

「それはよかった。では、出発しよう」

テッドさんは車を出した。後ろのトランクには光子さんが持たせてくれたおにぎり、サンドイッチ、果物や飲み物が満載されている。朝の道路は嬉しくなるほどすいていた。いよいよウェールズへの旅が始まる。最初の目的地であるアイアンブリッジの村をめざして、私たちの車はなめらかにハイウェイに入っていった。

**◆7月4日（火）続き◆**

コヴェントリーから西にバーミンガムを経てウェールズのシュルーズベリーに向かう途中の静かな山あいにその村はあった。今はひっそりと落ち着いた佇まいを見せるアイアンブリッジの村が歴史的に有名なのは、世界最古の鉄橋のおかげばかりではなく、ここがイギリスの産業革命の発祥の地ともいえるからだ。もともとが鉄の産地であった上に、18 世紀はじめにアブラハム・ダービーが純度の高い製鉄法を開発し、この地で量産に成功したことで、この小さな町は一気に活気づいた。町の中心をなすセヴァーン川に技術の粋と財力を結集させたアイアンブリッジが完成したのは 1779 年のことだった。近くに開けたブリスツ・ヒルの町には、当時活躍した溶鉱炉や町の建物が現在も保存され、産業革命当時の町の様子と人々の生活を紹介するためのオープンエアー・ミュージアムとなっていた。この日私たちが最初に訪れたのはこのブリスツ・ヒルだった。渋滞に巻き込まれたら最後、とんでもなく時間のかかってしまうハイウェイを、運転手のテッドさんの読みは大当たりして、私たちの車は渋滞にあうことなく快調に飛ばし、開園時間の 10 時よりも 30 分も早く一番乗りで到着した。10 時前には見学の子供たちを乗せた大型バスが続々と駐車場に入ってきた。

ゲートを入るとそこには 18 世紀の町が広がっていた。建物はすべて本物をそのまま移築したものだったが、最初に入った銀行で、白いあご髭をたくわえた老銀行員が格調高い発音で「ハロウ」と私たちを迎えてくれた時には、もしかしたらこの人も 18 世紀からやってきたのかと錯覚をおこすほどだった。18 世紀には女性が銀行に入ることは許されなかったそうだ。のちに女性解禁となってからも、女性たちが銀行に出かける時には、「裾の広がったスカートを履いて優雅に着飾って出かけたものですよ」と老紳士はひとしきり話し終えると、もったいぶった調子で 18 世紀に実際に使われていた帳簿を開いたり、お金と同様に価値のあったゴールドを量るための小さな天秤を取り出してみせたりした。

となりの薬局には壁一面に小さなガラス瓶が並び、その前に昔の映画で見かけるような時代物の髭剃り道具や量り売りの石鹸などが置かれていた。雑貨屋では郷愁をそそる家庭用のマッチ箱や蝿取り紙が、お菓子屋では色とりどりのキャンディの入ったガラス瓶や美しい絵が描かれているクッキー缶が、肉屋では美味しそうなソーセージが、パン屋では香ばしいパンが、実際に売られていた。芸術的な鉄製品を作り出す鍛冶屋の工房、天井からたくさんの蝋燭が吊るしてある蝋燭職人の工房、足踏みミシンでブラウスや袋物を縫いあげる小間物屋の工房、石膏細工職人の工房、ロックスミスと呼ばれる鍵職人の工房、ティンスミスと呼ばれる金属プレート職人の工房、動力エンジンモーターで粉をひく製粉所、町のシンボルであった溶鉱炉、役所、印刷屋、不動産屋、歯医者さん、お医者さん、町長さんの立派な家もあれば、貧しい庶民の粗末な家や豚小屋もあった。「大草原の小さな家」に出てくるような学校の教室では先生と子供たちが授業をしているところだった。長くて

細い棒を鞭がわりに手に持ち、子供たちに睨みをきかせている 18 世紀の先生を前にして、学校の遠足でやってきたらしい小学校低学年くらいの子供たちは、可哀想そうなくらい緊張しておとなしく座っていた。それにひきかえ外の子供たちは、校庭に設置されたメリーゴーランドのまわりをきゃあきゃあと声を張り上げて走り回っていた。

**石膏細工の工房で**

12 時 30 分に私たちはブリスツ・ヒルの町を出て、駐車場の木陰で光子さんお手製のお弁当を広げた。朝早く出てきた私たちはお腹がぺこぺこで、物も言わずに美味しそうなおにぎりやサンドイッチにかぶりついた。食べ終わると休む暇もなく、テッドさんは車を出した。次はいよいよ世界最古のアイアンブリッジだった。ものの 10 分ほどでサヴァーン川のほとりにある駐車場に着き、車を降りて、トールキーパーと呼ばれる関所を通ると、私たちは川の上を横切る幅の広い道路に出た。川の上を横切っているのだから、それも橋にちがいないのだが、コンクリートだか石だかで出来た味気ないもので、観光客の通行用に作られたのだろうかと私はいぶかしく思った。それにしてもなにもわざわざ、世界最古の鉄橋の脇にこんな変哲もない橋をどーんとかけることもないのに……。私は瀬川さんと顔を見合わせて、冗談を言いあった。

「まさかこれがアイアンブリッジだったりしてね……」

「もしそうだったら、怒るよね」

それから、テッドさんに尋ねた。

「ねえテッド、アイアンブリッジはどこ？」

テッドさんはあきれたように答えた。

「レイコが今立っている橋だよ」

「えっ、これ？？」

私はへらへらと照れ笑いしながらその味気ない橋を渡った。ところが、橋を渡りきったところから小道を下って、今度は橋のたもとから見上げるような形で橋を見て驚いた。

「わあ、本当だ。これはまさしくアイアンブリッジだわ！」

そこには見事に鉄を組み合わせて形作られた美しいアーチがまるで手品のように姿を見せていた。つまりアイアンブリッジはサイドから眺めてはじめてアイアンブリッジだと分かるのである。そう言えばガイドブックに載っていた写真も、ブリスツ・ヒルの入り口で買った絵葉書も、サイドから見た姿だった。アイアンブリッジの橋の上からはこの鉄の芸術は見えないのだ。その上、これは一回りして引き返す時にもう１度橋を渡っていて気がついたのだが、橋の欄干の手前にはありふれたスチール製の柵がずらりと並べられているの

だ。おそらく 18 世紀の遺物である欄干にむやみに人々が寄りかかったりしないようにとの配慮なのだろうが、これがこの橋を味気なく見せているのだった。

**アイアンブリッジ全景**

セヴァーン川のほとりにはカフェや宿屋やみやげ物屋が並んでいた。私は店の前に大きく「セール」と出ているみやげ物屋に入り、小さな蝋燭のセットを買った。ひとまわりして駐車場に戻るために橋の上を歩いていると、後ろから巨体をゆすりながら一人の女の人が追いかけてきた。さっきのみやげ物屋の売り子の女性で、頬を真っ赤にしてゼイゼイと肩で息をしながら、「蝋燭を買ったマダムですよね。これをお忘れです」と言うなり、私のカメラをにゅっと差し出した。私がうっかり店に置き忘れてきたのを、後で気づいて探し探し追ってきてくれたのだ。あっけに取られたのと、あまりの親切さに胸がいっぱいになったせいで、ただ「どうもありがとう」としか言葉が出てこない私に、その女性は「どういたしまして」と微笑むとまたふうふう言いながら駆けていった。テッドさんはまたあきれていた。

「全く君は運がいい。こんなことはこの国ではめったにないことなんだよ」

私は小さくなりながらも、カメラをなくさずに済んだことに内心ほっとしていた。

アイアンブリッジの周辺には、鉄の博物館、タイル博物館、陶磁器博物館、歴史博物館などが点在していた。その日の夕方までにウェールズの海辺の町まで行くことを考えると、残り時間で廻れるのはそのうちの一つだけだとテッドさんに言われて、私たちは「鉄の博物館」を選んだ。山あいの細い道は目印になるものも乏しく、テッドさんは勘を頼りに車を走らせたが、時には道に迷うこともあって、そんな時には思いきりよく車をユーターンさせたり、車を止めて地元の人に尋ねたりしてすぐに軌道修正をするので、時間のロスは最小限に押さえられた。地元の人らしい中年の男性がいかにも朴とつとした調子で道を教えてくれるのを見ているのは楽しかった。

この町の製鉄業の変遷を紹介する「鉄の博物館」を一回りした後、アイアンブリッジの村を後にした私たちは、緩やかな丘の中腹を駆け抜けると、まもなくウェールズに入った。ガイドブックによるとウェールズの特徴は、まず町の標識が英語とウェールズ語の二ヶ国語で表記してあること、起伏に満ちた美しい自然に恵まれていること、人々は自然を愛し、陽気で優しく歌が好きなことだったが、それらはおおむね正しかった。ウェールズ出身のテッドさんは、運転をしながら陽気に冗談をとばし、私たちのリクエストに応えて、素晴らしい声で歌を歌い、みんなが眠りはじめた時などには子守唄がわりの軽い音楽を流してくれた。車窓からは緩やかな丘陵に延々と牧場が続き、羊やヤギたちがのんびりと草をは

んでいるのがみえた。これらの牧草地には以前はたくさんの牛もいたのだが、狂牛病騒ぎ以来、めっきり数が減ったのだとテッドさんは説明した。鳥だって、テッドさんの子供の頃には空が暗くなるほどたくさん飛んでいたのに、今ではずいぶん少なくなってしまったと言う。いくらなんでも空が暗くなるほどの鳥というのは大げさだと可笑しかったが、これほど緑豊かなイギリスでも自然が破壊され、環境汚染が年々進んでいるのは事実らしい。

ウェールズの海辺の町、フェアボーン（Fairbourne）に着いたのは、5 時 30 分だった。

日本のガイドブックにはまず載っていないこの小さな町に泊まることにしたのは、ここがテッドさんのお薦めだったからだ。海のそばに開けた住宅地にはテッドさんのお兄様の家があり、テッドさん一家は毎夏のようにここでヴァケーションを楽しんでいるそうだ。予約していたフェアボーン・ホテルは、丘の中腹におとぎ話にでてくるお城という佇まいでポツンと建っていた。煉瓦作りの情緒のあるホテルの敷地には、私たちが泊まる部屋のある母屋とは別に、どうやらもうひとつ棟があって、そちらにはサマースクールの子供たちが泊まっているらしかった。ホテルのオーナー一家もここに住んでいると見えて、赤ん坊のぐずって泣く声や、それをあやすお母さんのおっとりとした声などが聞こえてきて、それがいかにものどかな田舎の夏という風情を感じさせた。

**アイリッシュシーに面した海岸にて**

夕食までの間に 1 時間ほど時間があるので、車で海まで行ってみようとテッドさんが提案した。歩いてもホテルから海までは 20 分とかからないらしいが、歩いて往復するには 1 時間は短すぎた。アイルランドとウェールズの間の海はアイリッシュシーと呼ばれる。フェアボーンはアイリッシュシーから細く入りこんだ入り江の付け根あたりにあるらしく、車を降りて最初に入り江の内側に面したまるで川のような貧弱な海を見た時には内心ひどくがっかりしたが、入り江の先のほうに歩いてゆくとそこには波の打ち寄せる本物の海が広がっていた。リゾート地ではないフェアボーンの海は人ひとりいなくて、おまけにどんよりと曇った天気のせいもあって、なんとなく寂しかった。入り江の対岸にはバーマスの町が見えた。

その日はテッドさんは海のそばにあるお兄様の家で泊まることになっていて、私たちをホテルまで送ってくれた後、今来た道を引き返して行った。私たちはホテルのレストランで 7 時に夕食を予約していた。向かいにあるバーではお酒を飲みながらゲームを楽しむ人たちで賑わっていたが、レストランには他に客はいなくて、私たち 6 人だけが窓のそばの特等席を占領して食事を始めることになった。コース料理のうち、スターターとメインディッシュとデザートは各自で好きなものを選べるのだが、テッドさんが散歩の前にメニュ

ーを見て薦めてくれたのは「GAMMON」というポークを使ったイギリス料理だった。その時には「じゃあ、私それにする！」と手を挙げて張り切っていた黒木さんと加納さんが、いざオーダーする段になって迷い始めた。ロンドンのレストランの料理にはさんざん失望させられたし、ここのレストランも私たちの他に客がいないところをみると、期待はしがたかった。
「ガモンなんて、なんか怪獣の名前みたい……」
と加納さんが言うと、黒木さんもうなずいた。
「いかにも油ぎっているって感じよね」
「でも……」と瀬川さんは言った。
「テッドさんは美味しいと言っていたよ」
すると、毎年アメリカへ行っている加納さんが言った。
「私、アメリカ人がすごく美味しいって言う料理を食べて、ものすごくまずかった経験があるの。味覚って国によって違うのよ」
　かくしてガモンの株はどんどん地に落ちていった。
「瀬川さん、若いんだからガモンに挑戦してみなさいよ！」
と主婦たちに言われて、ナイトのような瀬川さんは、
「分かった。じゃあ僕がガモンに挑戦するよ」と、
なんだか怪獣と決闘するみたいな話しになってしまった。結局、瀬川さんがガモン、上田さんと加納さんと重松さんがサーモン、黒木さんがチキン、私は野菜のラザニアを頼んだ。
　まず、スターターから始まり、次に生野菜とパスタが出て、いよいよメインディッシュの出番がきた。問題のガモンはポークハムとステーキの中間のようなもので、こんがりとソテーされてなかなか美味しそうに見えた。瀬川さんは一口食べると、「むむ、美味しい！」と言い放った。それを聞いたみんなは「私もガモンを味見したい！」と言い出し、瀬川さんのガモンは一口大に細かく切られて、みんなのお皿に取り分けられた。
「ほんとだわ、おいしい！」
ガモンの株はいっきに急上昇した。
　各自の皿についている焼トマトなどの付け合せの他に、マッシュルームのソテー、ナスのソテー、フライドポテト、茹でじゃがいもが大皿 2 枚に山盛りに盛られて出てきた。恐ろしいほどの量だったが、料理はどれもこれも素晴らしく美味しかった。デザートは上田さんと黒木さんと重松さんがチーズケーキ、瀬川さんと加納さんがアップルパイ、私はチョコレートケーキで、これに薫り高い紅茶がついた。ウェールズの片田舎で思いがけず豪華なイギリス料理にありつけた私たちは心から満たされて、テーブルの上はいつになく話が弾み、それぞれの子供時代の思い出話まで飛び出して、笑いが絶えなかった。レストランは最後までまったくの貸しきり状態で、だから、その夜のディナーはなにか私たちだけのささやかな祝宴みたいだった。

## ◆7月5日（木）◆

　ウェールズで迎えたさわやかな朝に私たちは海まで散歩に出かけた。ホテルの前の坂をいっきに下ると、そこから海まで一直線に平坦な道が続いていて、その途中にひなびた電

車の駅があった。プラットフォームに「Fairbourne」と駅名の表示があるだけで、改札口もない単線の無人駅だ。ここから電車に乗って南下すると 40 数分で CAT のある終点の「Machylleth」に着く。ウェールズの地名には読むのに苦労するものが多く、この「マカンスリス」という地名もはじめはなかなか読めなかった。ウェールズ語の特徴として、Ｌが二つ重なる場合には、「Ｌ」の発音をしながら「CH」と音を出すのだそうで、例えばこの日の帰りに立ち寄った「Llangollen」は、カタカナで書くと「スランゴスリン」となるが、ウェールズ人の実際の発音は私にはとても真似できない。

海から戻って、ホテルでたっぷりのイングリッシュ・ブレックファーストを食べていると、テッドさんがはやばやと姿をあらわした。９時 30 分にフェアボーン・ホテルを後にして、今回のエコツアーの目玉ともいえる CAT（Centre for Alternative Technology）に向かった。CAT には私たちの訪問は伝えてあり、現地でのガイドも頼んでいた。これは２時間で 50 ポンドかかるが、こちらの興味や目的にあわせて適任の専門家をつけてくれる。前払いのガイド料と一緒に送る申込書には、土曜講座の活動内容と興味のある分野として（１）科学技術と社会（化学物質、原発、電磁波など）、（２）環境、（３）それらの教育、などと書きこんだが、問題は団体名だった。私は上田さんに尋ねた。

「「土曜講座」って英語で何て言えばいいの？やっぱり「サタデーセミナー」とかになるわけ？」

二人で考えた末に、単純にローマ字書きの「DOYOUKOUZA」でいこうということになった。団体名の欄に「DOYOUKOUZA」と書き込みながら、私は「これでいよいよ土曜講座も世界にデビューか……」なんて思ったりした。

1 時間で CAT の駐車場に着くと、テッドさんと別れて、6 人は入り口で入場券を買い、Lower　Station から水の力を利用して動く Cliff　Railway に乗り込んでいっきに山を駆け上がり、CAT の園内に到着した。14 人乗りのこんなに重い乗り物が、どうして水の力で山を上ることができるのかと不思議に思うところから CAT の学習が始まる。なんとも上手い仕掛けである。しかし、この Cliff　Railway が動くのは、４月から 10 月の春から秋にかけてで、冬のシーズンには坂道を歩いて自分で CAT の園内まで上ってこなければならない。そこで CAT の入場料は、４月から 10 月までは大人 7 ポンド（学生 5 ポンド）、11 月から 3 月までは４.9 ポンド（学生 3.9 ポンド）に設定されている。園内に入って思ったのは「取り立てて目を引く何かがあるわけではない」ということだった。目の前にはごく普通の池があり、ごく普通の木々があり、道があり、畑があり、家があり、山があった。しかも、広さは私の想像よりもはるかに小規模だった。見学コースを上から見るとほぼ楕円形をしているのだが、その長い一辺の端から端まで、つまり入口のインフォメーションセンターから最も奥に位置するレストランまで、それが歩いて２分で行けてしまうのである。

ここでは「何か特別の」ではなく、「ごく自然に」ということが重要なのだ。これにはいくつかの意味があると私は考える。第 1 に「ごく自然に」の「自然」はまさに自然界の「自然」で、「自然の力を利用する」こと。太陽、風、水、土、微生物、そのような「自然の力」を最大限に利用することである。そのための技術を開発し、情報発信している。第 2 に、「飾り気のない」とか「ほどほどの」という意味においての「ごく自然に」である。それは「近代的な建物」や「ファッショナブルな生活」をかっこいいと見なす現代社会が大量生産、大量消費、大量廃棄に走ったこととは対極のところにある生き方で、あまりぱっとしない

かもしれないけれど、「雨風がしのげる日当たりの良いつつましい家があり、自分が食べる分だけを作る」生き方だ。

池を右手に見ながら少し歩くと左手にオーガニック・ガーデンがあり、若い男性が二人、上半身裸で働いていた。「こんにちは」と声をかけた男の子は、驚くほど背が高く、ブラッド・ピット並みにハンサムだった。彼は学生で、6 ヶ月間 CAT に住み込んで働いているのだそうだ。温室の中に置いてあるラジカセからは静かなクラシック音楽が流れていた。そういえば草花に音楽を聞かせるとよく育つという話を聞いたことがある。本当に効果があるのかと尋ねてみた。

「効果はあるよ。すごく育ちがよくなるんだ」

「どうしてそれが分かるの？」

「他の農園の仲間たちともいろんな情報交換をしているからね。それに音楽を聞かせると花はとてもハッピーに見えるし……」

ああ、こういう若者が、「車を乗り回し、ジャンクフードを食べ、夜な夜なディスコにたむろする」のではなく、「太陽の下で働き、木蔭で休み、風と水と土の恩恵をたっぷり受けて、草花と話をする」。それが、まあ要するにＣＡＴのめざす方向であるのだなと私は思った。

12 時 30 分にガイドを頼んでいたので、その前に昼食を済ませておこうと、レストランに向かった。前夜におこなった勉強会では、CAT に何年も住んでいた人の告白本に「CAT の理念は素晴らしいが、食事のまずさには閉口した」と書かれていたことが話題になった。そんなこともあって、私たちはフェアーボーン・ホテルの朝食の残りのパンなどをバッグに入れて持ってきていた。そこでレストランでは CAT で採れたオーガニック野菜のサラダを大盛り 2 皿と焼じゃがいもを買い、外にあるテーブルでみんなで分け合って食べることにした。イギリス人はあまり生野菜を食べないらしく、町のレストランでは新鮮な生野菜にありつくことができず、私たちは生野菜欠乏症にかかっていた。だから久しぶりの生野菜、しかも安心のオーガニック野菜はことのほか美味しかった。

食べ終わって、食器を乗せたトレイを運ぼうとして、加納さんがつまずいて転んだ拍子にベンチの角で思いっきり耳をぶつけてしまった。食器が落ちる大きな音を聞きつけて、レストランから職員の女性が飛んできて、事情を知るとすぐに救急班に連絡を取り、冷たい水をコップに注いで持ってきてくれた。ほどなく駆けつけた救急スタッフは、手当てを終えた後もそのまましばらく側に付き添っていた。加納さんはすっかり落ち着きを取り戻した。見知らぬ土地で困った時に出あう親切や温かい言葉ほどありがたいものはない。なんでもない時にはさりげなく放っておいてくれて、必要は時にはあたたかく手を貸してくれる。CAT に感じられる「ごく自然に」のコンセプトの第 3 の意味は、人間関係におけるこの「さりげなさ」と「あたたかさ」なのだと私は思う。言いかえれば、ひとりひとりを別個の個性として尊重しつつ、それぞれが無関心ではなく温かく連帯しあえる社会である。それは、設立当初には「狂信的な理想主義者」と言われた CAT の実践者が、25 年を経た今では「堅実な実用主義者」に取ってかわったことからも伺えるのであるが、試行錯誤を繰り返し、地道に実践を重ね、着実に実力を培って、ようやく CAT がたどり着いた「持続可能な社会」のあり方なのだろうという気がする。

約束の 12 時 30 分に、インフォメーションセンターに行くと、職員がガイドを紹介してくれた。がっちりとした体、なにか自由人という感じの風貌、しいていえば画家か作家の

雰囲気、いかにも自然を愛する人という感じのおだやかな目をしたピーター・ハーパーさんは、AT（Alternative　Technology）の提唱者として有名であり、CAT の設立当初から関わっている数少ないメンバーのひとりだ。現在は執筆家でもあり、多くの著書があり、そのうち 2 冊は日本語訳が出版されている。日本にも 2 度訪問したことがあって、日本の大学生たちとも交流があるという。CAT の事務局は、この AT の大家であり日本通のピーターさんを「DOYOUKOUZA」の適任のガイドとしてコーディネートしてくれたのだった。最初に 30 分ほど私たちと話した後、ピーターさんは CAT の中を案内してくれた。この見学の内容やピーターさんとの議論については重松真由美さんが報告している（『どよう便り』47＋48 号、来年の 51 号）。

私はピーターさんと２時間一緒に過ごしたことで、先に述べた３つの意味で「ごく自然に」生きることの豊かさを教えてもらった。気負わないナチュラルな生き方を実践しているピーターさんは人間的な温かさに溢れ、実にかっこよかった。

**CAT の太陽電池パネル**

3時30分にUpper　StationからCliff　Railwayに乗って下っていくと、Lower　Stationでテッドさんが待ち構えていて、Cliff の中の私たちに手を振り、カメラのシャッターをきった。CAT を出発してウェールズの丘を延々と走る車の中で、私たちは心地よい眠りについた。途中に立ち寄ったスランゴスリンの町では音楽祭が開かれていて、町のあちこちに万国旗がはためいていた。テッドさんはその旗のひとつを指差すと、私に言った。

「ほら、見てごらん。あの旗はどこのか分かる？」

濃いオレンジ色の地の真ん中には黄色の丸が描かれ、そこから八方に黄色い筋が広がっている。見たこともない旗だった。

「うーん、分からないわ」

私が答えると、テッドさんは、あれあれどうしたの？まだ眠っているのかい？とでも言いたそうな顔をした。

「よく見てごらんよ。日本の旗だろう？」

「いいえ、違うわ」

テッドさんは何か勘違いしているらしいと私は思ったが、まもなく町の真ん中を流れる川に出て、私たちの関心は急流の中で奮闘している男性のほうに向かった。2 日前は豪雨だったというウェールズの川は濁り、増水して、みるからに危険な雰囲気が漂っていた。その川の真ん中にパンツいっちょうの若い男性がいて、流されそうになりながら岸にたどり着

こうと苦労していた。川底から生えている葦につかまり一歩一歩必死に歩むのだが、濁流のすさまじい勢いに時には 2、3 メートルあっという間に押し流された。だんだん私は心配になってきた。こんなふうに橋の上からのんきに見物なんかしていていいのだろうか、助けを呼んだほうがいいのではないか。ところが、若者はやっとの思いで岸にたどり着き這い上がってきたと思ったとたんに、なんと再びもとの川に頭からダイビングをして見せた。要するにこの命知らずのバカ男は、自分の勇敢さを見物人に見せたいだけだったらしい。私たちは歩き出して小さなカフェに入った。誰かが万国旗の話しをはじめた時、テッドさんは、さっきの旗をまたもや「日本の旗」だと言った。
「テッド、あれは日本の旗ではないわ。日本の旗はね、白地に真ん中に赤い丸があるのよ」言ったあとで気が付いた。私は「日の丸・君が代法制化」に断固反対していたのだった。それがどうしてまた、こんなにむきになって日の丸の説明なんかしてしまったのだろう。

**アクアダクトにて**

すでに 6 時を過ぎていた。コヴェントリーでは滝さん夫妻が夕食の準備をして待ってくれているはずだったが、「もう一箇所どうしても案内したいところがある」とテッドさんは言った。そこはウェールズの有名な運河の船着き場だった。丘の上を走る運河に船を出すと、みるみる運河の幅は狭くなり、船 1 艘がぎりぎり通れるほどになってしまう。運河の先には渓谷があり、運河はなんとこの渓谷にかけられた巨大な橋の上を渡ってゆくのである。「アクアダクト」と呼ばれるこの運河の橋のふちには細い歩道があって、人は歩いて渡ることができる。高い橋の上に立つと、絵のように美しい壮大な風景が目の前いっぱいに広がった。眼下の森林の上には私たちが立っているアクアダクトの大きな影がくっきりと映し出され、渓谷から平野に向かって流れる川は一筋の道のように見える。はるかかなたにはもうひとつのアクアダクトが、まるで何かの遺跡みたいに神聖な雰囲気を漂わせて横たわっていた。ちょうど向こうからボートがやってきて私たちの横を通りすぎていった。渓谷にかかる橋を、汽車ではなく船が通ってゆくのである。このアクアダクトは 18 世紀の終わりに、ウェールズ出身の偉大なエンジニアであるトーマス・テルフォードによって建設された。18 本の橋げたはこの地方でとれる石で作られ、その上に鉄製の橋が渡してある。川からの高さはおよそ 40 メートルあるという。テッドさんは橋のわき道から谷底へと私たちを連れていった。渓谷を流れる川のそばに立ち、川に落ちないように足場を固めてから上を見上げると、木々の間から先ほどの橋がそびえたっているのが見えた。
コヴェントリーに着いたのは夜 8 時だった。滝家の前に車が着くと、すぐにトモさんが

飛び出してきて、「お疲れさま」と私たちに声をかけた。「ただいまあ」と答えて、みんなは勝手知ったる我が家みたいに滝さんの家に入っていった。途中で知らせた到着の時間よりは 30 分早かったので、光子さんは、
「あら、大変！まだ 30 分あると思っていたので、のんびりと食事の準備をしていたところなのよ」
と言ったが、台所からはすでにおいしそうな匂いが漂ってきた。素麺に天ぷらに豆腐とこんにゃくの胡麻和え……。「わあい！」とみんなは子供のように歓声をあげた。やはり和食はこたえられない。おいしさが全身にしみわたって、身も心も解きほぐされていくようだった。私たちは「夕餉を囲む大家族」といった賑やかさで、ずるずると音をたてて素麺をすすったり、勢いあまってむせたりしながら、ウェールズでの出来事を夢中になってしゃべりまくった。
　夜遅く、私たちはそれぞれの場所で眠りについた。重松真由美さんは滝家の 2 階の一室で、上田さんと瀬川さんの男性 2 人は隣家の庭に置かれたキャンピングカーの中で、そして、黒木さんと加納さんと私の主婦 3 人組はビレッジホテルのファミリールームで……。次から次へとお楽しみが続いた旅行も、気がつけばもう残りわずかになってしまっていた。

**◆7月6日（金）◆**

　朝起きると、空はいまにも雨が降り出しそうな気配だった。午前 6 時 30 分、主婦 3 人組はねぼけまなこで水着を着て、ホテルの地下のプールに向かった。朝、起きたてにプールに飛び込むと人魚にでもなった気になる。ひと泳ぎした後、ジャグジーにつかりながら、その日の予定を頭の中で確認した。まずチェルトナムでミセス・テーラーに会う。みんなで一緒にコンサートを聴く。そしてランチ。それから後は滝さんとテッドさんにお任せだった。コッツウォルズの村々は、どこを選んでもおとぎ話しにでてくるような愛らしさに違いなかった。プールから上がると、私はその日のために持って来ていた白地にブルーの花柄のワンピースを着て、お揃いのネックレスをつけた。
　８時 30 分にホテルのラウンジで待っていると、「おはようございます」とトモさんが早足で入ってきた。
「さあ、すぐに出発です！」
きびきびとした口調は現地添乗員という感じだ。入り口ではテッドさんが、こちらはベテランのドアボーイといったポーズで「さあ、どうぞ」と丁重にドアを開けてくれた。私たち３人は「お客のマダム」気取りで、ありがとうと微笑みながらドアを通り抜けた。白いワイシャツ、ブルーのネクタイ、紺のジャケットというスマートないでたちできめたテッドさんは、惚れ惚れするほどの紳士ぶりで、私は、ああ、やっぱりお洒落をしてきてよかったとひそかに思った。光子さんが運転する車に先導されて、まずウォーリック大学で、先日の滝家のパーティーで会ったフミコさんとコウイチくん母子をひろってから、一行は美しい田園風景の中を２台の車を連ね、コッツウォルズの西の玄関口といわれるチェルトナムに向かった。
　毎年夏のはじめに国際音楽祭が開催されるチェルトナムの町は、18 世紀に温泉が発見され、ジョージ３世が家族を連れて訪れて以来、王室御用達の温泉保養地として栄えてきた。

私たちがこの日コンサートを聴くことになっていたピットヴィル・ポンプ・ルームは、1830年に鉱泉の汲み上げ場として建てられた、ポンプ・ルームなどという庶民的な名前には似つかわしくない、ギリシャ教会風の優美な建物で、かつては温泉保養に訪れる裕福な人たちの華やかな社交場だったらしい。10 時すぎに到着して建物の前で記念撮影をしているところに、光子さんの古い知人で、彼女が「イギリスの母」と呼ぶミセス・テーラーが愛車を運転してやってきた。80 歳をとっくに過ぎて、チェルトナムでひとり暮らしをしているミセス・テーラーは、光子さんのメールにしばしば登場してくる。背は低いがふくよかな体型、きっちりとパーマをかけたシルバーヘアーに金縁めがね、白地にグレーのストライプが入った涼しそうなワンピース着て、幼稚園の園長先生とでもいう雰囲気は、初めて会うというのに、なんだかずっと前から知っているような気がした。ミセス・テーラーのほうも私たちのことをまるで昔の教え子のように「まあまあ、みなさん、よく来たわねえ」と嬉しそうにひとりずつ握手をしたり、肩を抱き寄せたりした。

11 時にコンサートが始まった。演奏は「タカーチ・カルテット（Takacs　Quartet）」で、今年のチェルトナム音楽祭の呼び物のひとつだった。6 月のはじめに一時帰国中の滝夫妻から「たぶん上田さんは好きだと思うよ」とコンサートの案内を手渡された時、私はこのグループの名前さえ知らなかったが、上田さんは飛び上がって喜んだ。

「えっ！？タカーチ・カルテットのコンサートが聴けるの！？」

音楽ファンにはこたえられない素晴らしい演奏家たちなのだという。さっそくチケットを 10 枚、私たち 6 名に滝夫妻にテッドさんにミセス・テーラーの分を電話で申し込んだ。電話口に出た青年に「あなたはラッキーだ。最後の 10 席ですよ」と言われたとおり、私たちの席は最後尾の 2 列の左右の端に振り分けられて、いかにも「最後に残った席」という位置だったが、それでもドリンク付きで 9 ポンド（1600 円）という安さは驚きだった。そればかりか、25 歳以下の重松さんは半額になり、他の 9 名も 10 名以上の団体割引が効いて一割引になり、その上、1 週間後に国際郵便で送られてきたチケットには、はるばる日本から来る旅行者を歓迎するかのように、イギリスの観光名所のリーフレットがどっさりと同封されていた。

ホールの中はぎっしりと埋まった人たちのせいで蒸し暑く、テッドさんはせっかくめかしこんでいたのに、上着もネクタイもはずしてワイシャツ姿になっていた。演奏が始まるとすぐに、私の左隣りに座っていた上田さんは首を振り、膝の上で手がリズムを取りはじめた。やがて体全体がスウィングしはじめると、つながっている椅子を通してその揺れが私に伝わり、さらに私の右隣りのテッドさんにまで伝わり、テッドさんと私は時々ちらりと震源地のほうに目をやっては、幸せに酔いしれている上田さんを見て、顔を見合わせてにやりとした。ベートーベン、バルトーク、そして新進作曲家のロビン・ハロウェイ……タカーチ・カルテットの演奏は上田さんが感激するとおり深い音楽性を発揮し、ドーム型の高い天井から音は降るように響き渡った。最後のハイドンの弦楽四重奏が終わると、嵐のような拍手が沸き起こった。前列の滝夫妻とミセス・テーラーは拍手しながら後ろを振り返り、私たちに向かって「素晴らしい！」「Wonderful！」と繰り返した。反対側の後ろ端に目をやると、瀬川さん、重松さん、加納さん、黒木さんの 4 人が聴衆の中で満足げに笑い合いながら大きな拍手を送っているのが見えた。

コンサートが終わって外に出るとあたりはしっとりと濡れていた。私たちが演奏に酔い

しれていた間に一雨降ったらしい。雨はすでに上がって、空は薄い膜を１枚はがしたように明るさを増していた。コンサートの間、チェルトナムの町を散策していたフミコさんとコウイチくんも戻ってきて、ミセス・テーラーの車も加わって３台となった私たち一行は、ランチを食べにチェルトナムの町を後にした。20 分ほどで着いたのは、ウィンチコームの近くのファームだった。野菜畑の真ん中に四角い小屋がポツンと建っていて、それはほとんど大きな物置き小屋という感じだったが、中はこじんまりとしたレストランとその隣りにはちょっとした土産物屋があった。地元の人でなければ、まず踏み入れることもないだろうこのファームのレストランは、ミセス・テーラーのお気に入りで、おいしいスープやパンやフィッシュパイなどのイギリスの家庭料理が手頃な値段で食べられた。レストランは予約してあったので、窓際の大きなテーブルに通された。いかにも農夫といった感じのおじさんが注文を取りに来て、私たちはそれぞれ好きなものを頼んだ。私が注文したのはチキン・キャセロールで、隣りに座ったテッドさんは目玉焼き付きガモンだった。ガモンはテッドさんの大好物らしいが、ハムの親分みたいなガモンに目玉焼きが添えてあるのを見て、私は「ああ、なーんだ。ハムエッグじゃない！？」と思った。窓の外には立派な葉を茂らせた野菜畑が続いていて、葉陰から人参をくわえたピーターラビットがいまにもぴょこんと顔を出しそうな気がした。その畑で採れた新鮮な野菜をたっぷり使った料理はどれも絶品で、12 人が座ったテーブルは賑やかなおしゃべりと笑い声で溢れかえった。

素晴らしいランチの後、チェルトナムに帰るミセス・テーラーとあわただしくお別れをして、私たちは再び田園風景の中を走った。ものの 10 分で着いた小さな町は、たぶんウィンチコームだと思うのだけれど、「名も知れぬ村」と呼んだほうがぴったりくる、俗世界からかけ離れてそこだけ時が止まったみたいな、ひっそりとした村だった。あまりにも静まり返っているので、みんながいっせいに車から降りてバタンバタンとドアを閉める音でさえ、とんでもない大音響に思えてはばかられた。

「さあ、時間がないわ。10 分後には出発します」

光子さんに言われて、私たちはばらばらと散って歩き出した。この地方独特の蜂蜜色をしたライムストーン（石灰岩）を積み重ねて作られた家々、玄関先や窓にあふれる色とりどりの花、なだらかな丘陵に広がる牧場、白い点々に見える羊たち。すべてが一幅の清らかな絵のようだった。古くから良質の羊毛が採れることで知られ、羊毛産業で栄えたこの丘陵地帯の村々は、石炭が採れないことが災いして 18 世紀後半の産業革命の機械化の波に追いつけず、それに加えて、一帯は地盤が弱く、鉄道網が発達しなかった。こうしてコッツウォルズはすっかり時代に取り残され、人々は自然の中で昔ながらの静かな生活を守り続けてきたのだった。

**ローワー・スローターにて筆者**

　アイ川のほとりに開けた愛らしい村、ローワー・スローター。
「さあ、ここでは 30 分です！」
光子さんの声が響く。小川にかかった低い橋を渡ると水車小屋があり、その横には小さなミュージーアムと土産物屋があった。カメラマン役の瀬川さんは大忙しだ。彼が使っているカメラは、実は上田さんが思案の末に旅行の前日に電器店に出かけ、大枚をはたいて買ってきたデジタル・カメラで、旅行の記録を撮ってほしいと上田さんからそれを手渡された瀬川さんは、行きの飛行機の中で取り扱い説明書を読み、毎日の実践で腕を磨いていた。とりわけこの日のコッツォルズめぐりは、カメラマンの心をくすぐるスポットがやたら多くて、瀬川さんは軽やかなフットワークであちこちに出没し、シャッターを切った。川のほとりで、橋の上で、水車小屋の前で、土産物屋の中で……。
　最後に寄ったのは、19 世紀の著名な芸術家ウィリアム・モリスが「イングランドで最も美しい村」と賞賛した村、バイブリー。テムズの支流のひとつ、コルン川のほとりに車が着いた時、わーっと小さな歓声があがった。静かな水面の上を白鳥が雛たちを引き連れてゆったりと泳いでいた。緑は濃く深くあたりを包み、グレーのライムストーンで造られた家々が軒を連ねている。橋を渡った先の一帯は、ナショナルトラストが管理していて、その美しい自然と家並みは未来へと引き継がれてゆく。小川に沿った遊歩道を散策し、緩やかな坂道を歩いて丘の上にあがると、古い石造りの教会がひっそりと建っていた。教会の裏には、ちょっとさびれた感じの墓地があって、何百年もの歳月を物語る石の墓標が物悲しげに立ち並んでいる。他の人たちからはだいぶ離れて先頭を歩いていた私と光子さんが、おしゃべりしながら墓地の端まで来て、目の前の小さな木戸をぎーっと開けると、そこにはバラの咲き乱れる庭があった。
「まるで秘密の花園ね」
私がつぶやくと、光子さんはバラのアーチをくぐりながら、ふふっと笑った。目の前に建っているのは風格のあるホテル「バイブリー・コート」で、どうやらそのバラの庭はホテルの裏庭にあたるらしかった。優雅さを絵に描いたような「バイブリー・コート」の建物は、1633 年に貴族の館として建てられ、王侯貴族もしばしば立ち寄る由緒正しき経歴を持つが、19 世紀になって売りにだされた。この少々センセーショナルな出来事は、チャールズ・ディケンズの小説の題材にもなったという。その後何人かのオーナーを経て、最後のオーナーだったレディー・クラークが亡くなった後、この美しい館は 1968 年にホテルとして開業した。ボーイに頼んで、前庭の木蔭でアフタヌーン・ティーを飲むことにした。そ

こからは広い広い庭全体が見渡せる。香り高いお茶のポットが運ばれてきた。白いカップに注ぐとほんわりと湯気が立ちのぼり、みんなの顔がほっと和んだ。この日、瀬川さんが撮った写真は 100 枚を超えたが、その中で私が一番好きなのは、このバイブリーコートの庭で撮ったアフタヌーンティーのスナップだ。豊かな木々と花に囲まれて、全員が満ち足りた笑顔でお茶を飲んでいる、今にも笑い声が聞こえてきそうな写真が数枚、その優雅で贅沢な午後のひとときが夢でなかった証拠のように、いま私の手許に残されている。

**バイブリー・コートにてお茶を楽しむ**

コッツウォルズからの帰り道、光子さんはぐんぐんとスピードを上げた。すでに６時を過ぎていたから、夕方と言ってもいい時刻ではあったけれど、夏のイングランドではまだ昼下がりくらいにしか思えなかった。コヴェントリーの町に入ったところで、テッドさんは光子さんの車と分かれて、郊外の運河に向かった。「どうしても見せたい」とテッドさんが言ったのは、運河にあるたくさんの水門だった。

自然が造る川と違って、運河は船の道路として人間が作るので、地形上の多少の無理などおかまいなしに通してしまう。例えば斜面に運河を造ろうとすれば、いっきに水が流れ落ちない工夫として水量を調節するための水門を設ける。船が通る時には、それらの水門をひとつひとつ開けたり閉じたりして、水のレベルを整えながら進んでゆくのだ。なんとも気の遠くなるような悠長な船旅である。水門の上を一匹の犬が渡って行った。うっすらと靄（もや）がかかった田園の風景に、たくさんの水門の白と黒のコントラストがしっくりと調和して綺麗だった。

その夜の滝家での夕食は、冷たい蕎麦、ズッキーニの温野菜詰め、キムチ豆腐だった。光子さんは子沢山の母親みたいに、みんなの食べっぷりを眺め、甲斐甲斐しく世話を焼いた。そばが大好物のトモさんが、最初のひとすすりをのみこんでから、「ああ、うまい！やっぱりそばが一番だなあ」と、まるで吠えるみたいに大声で言ったものだから、みんなはくすくすと笑った。９時すぎにテッドさんとシーラさんのご夫妻が挨拶にやってきた。光子さんの煎れたコーヒーの香りが立ち込める居間で、私たちはおしゃべりを楽しみ、記念写真を撮った。全員が写真に入るように、リモコンを使って撮ろうと、すっかりカメラマンぶりが板についた瀬川さんが、張り切ってみんなを並ばせ、カメラを設置し、いざ「はい、チーズ」という段になって、

“ I don’t know how to use it. ”

使い方が分からないと思い出したように言い出したのには、全員がずっこけ、大爆笑となった。結局、すぐに撮影は成功したのだけれど、その時の写真は、みんなタイミングをつ

かめきれずに、何となく中途半端な笑顔で映っている。

## ◆7月7日（土）◆

ロンドンに帰る朝、ビレッジホテルで、いつもよりゆっくり起きた主婦３人組は、プールでひと泳ぎした後、身支度とパッキングを済ませて、ダイニングルームに降りていった。いつもは８時 30 分に迎えがくるので、あわただしく朝食を取っていたが、この日は 11 時に出発なので、たっぷりと時間があった。

ウェートレスが注文を取りにきた。イングリッシュ・ブレックファーストは、卵料理、ポテト料理、焼トマト、マッシュルーム、ベーコン、ソーセージ、軟らかく煮た豆というのが定番で、もちろん全部頼んでもいいのだけれど、その日の気分で好きなものを注文する。「スクランブルエッグにマッシュポテトにトマトにベーコン」とか「目玉焼き２個とフライドポテトとトマトとソーセージと豆」という具合に。これにグレープフルーツとかトマトのジュースやミルクにシリアル、ヨーグルト、チーズ、果物などをセルフサービスで選び、この他、温かいトーストと紅茶かコーヒーが運ばれてくる。とかく悪評高いイギリスの料理の中で、そう当たり外れのないのがこのボリューム豊かな朝食で、だから、旅行者がイギリスでおいしい料理にありつきたかったら、「１日３食朝食を注文せよ」と言われているくらいだ。もちろんそんなことは実際にはできないのだけれど……。なかでも私が好きなのは、イギリスの朝食ででる薄いかりかりトーストで、旧式のトースターでこんがりと焼いたのを、対角線で切った三角形のトーストが、金属製のトーストホルダーに挟まれて運ばれてくると、それだけで「さあ、今日も張り切っていこう」という気分になる。

10 時 50 分にラウンジに滝夫妻とテッドさんを先頭にみんながどやどやと現れた。とうとう、出発だった。私は光子さんと腕を組み、じゃれあいながら外に出た。それから、はじめてコヴェントリーに着いた時と同じように、テッドさんの乗用車の助手席に座って、コーチ・ステーションまで行った。バスを待っている時、テッドさんは「泣きそうだよ」と眼鏡をはずしておどけてみせたが、私たちが乗り込んだバスがゆっくりと動き始めると、コヴェントリーに残る 3 人はバスの中がよく見える位置まで走り出て、爽やかな笑顔で両手を大きく振って見送ってくれた。ロータリーをひとまわりしたバスが３人の横を走りぬける時、私はバスの一番前に立って彼らに見えるように指でピースサインをした。瀬川さんと上田さんが 3 人に向かって「おーっ」と掛け声をかけた。加納さんと重松さんは「ありがとう！」「バイバーイ」と叫びながら、黒木さんは感極まって涙を流しながら手を振った。

11 時 35 分にコヴェントリーを発って、しばらく走るとポツリポツリと雨が降り始めた。ロンドンも雨かしら？と私は思った。ロンドンに着いてからの予定はまだ何ひとつ決めていなかった。1 時 40 分にヴィクトリア・コーチステーションに着いた時、やはり町にはかすかな雨が降っていた。傘をさしている人はほとんどいなかったのだけれど、私はバックから折りたたみ傘を出して、スーツケースの上にかざしながら苦労して歩道を渡った。ヴィクトリア駅は相変わらずごったがえしていて、ああ、ロンドンに戻ってきたんだという実感が湧いた。ワンデイ・トラベルカードを買って地下鉄に乗り込む。夜までには時間がある。まだまだお楽しみはこれからだ。アールズコート駅前の予約していたラムシーズホ

テルにひとまず荷物を置くと、私たちは夕方の待ち合わせ場所を決めてから、それぞれに出発した。雨はすっかり上がっていた。

私は上田さんと瀬川さんの博物館コンビにくっついて、サウスケンジントンにある自然史博物館に向かった。この博物館は、医師のH．スローン卿所蔵の標本が没後に寄贈されたことによって、1753 年に大英博物館内に作られた自然史部門がはじまりで、1860 年に独立してサウスケンジントンに移された。1881 年に完成した現在の建物は、A．ウォーターハウスが設計したもので、大聖堂のような荘厳さと美しさを誇っている。アーチ型の入り口を入ると、目の前にどーんと迫力のある恐竜の骨格が置かれ、それから、記憶がさだかではないのだけれど、ものすごく大きなアルマジロとか、太古の巨大カメムシの化石とか、恐竜の卵とか、ワニとかワニ皮のバックとかが飾ってあった。この博物館は世界中の動植物に関する展示を目的とし、現在の標本数は約４億点にものぼるという。

単に標本を並べているだけではなく、さまざまな見せ方の工夫がしてある。例えばウマは走っている姿勢で展示されていたり、ウマの骨格とニンゲンの骨格がどちらも歩いている恰好をして並んでいて、四足歩行と二足歩行の違いを骨格で比較できたりする。「大きな哺乳類たち」というパネルにはクジラ、ゾウ、キリン、ラクダ、サイ、クマなどのイラストが描かれていて、その前に体重計が置いてある。自分の好きな動物のボタンを押して体重計に乗ると、乗った人の体重と動物の体重の両方の数字と、その動物がその人の何倍にあたるかがパネルの窓に表示される。たとえばラクダの絵を選ぶとする。ラクダの体重を約 500 キロとして、25 キロの子どもなら 20 倍、50 キロの人なら 10 倍、70 キロの人なら 7 倍と出る。「ラクダ」と「私」を結び付けて考えることで「大きさ」の理解は進む。

**自然史博物館の一角で**

もうひとつ例をあげると、たとえば細胞についての説明はこんなふうだ。「体の中にはいろんなタイプの細胞があり、それぞれ働きは違います」と書いてある下に、５種類の細胞の図が縦にずらりと並んでいる。その横には「町でいろんな人が働いているように」と書かれていて、それぞれの細胞と１対になって、ある職業の人たちの写真が並べてある。「物を運ぶ人」「悪者を追い払う人」「郵便配達の人」「ビルの鉄骨を組み立てる人」「力仕事をする人」など。これを見るとなんとなくそれぞれの細胞の働きが連想できる。説明は続く。「体の中にはもっともっとたくさんの細胞があって、それぞれの働きをしています。人は仕事をいくつも変えることができますが、細胞は専ら自分に適したひとつの仕事だけをやりとげます」

ふと見ると、人ごみの中に見覚えのある顔があった。加納さんと黒木さんだ。なんだか１年ぶりに友達とばったり出くわしたみたいになつかしい気がしたけれど、実際には１時間半前まで一緒にいた。それにしても広い博物館の中でよくまあ出会えたものだ。
「わあー、どうしたの！？ナショナルギャラリーに行ったんじゃなかったの？」
私は嬉しい声をあげた。
「そのつもりで地下鉄で向かったのだけれど、途中で気が変わって引返してきたの」と加納さんが言うと、黒木さんが続けた。
「加納さんがどうしてもゴキブリの祖先を見たくなったって言うから……」
言い終わった時には、すでに加納さんの姿はなかった。

自然史博物館を閉館まで見た５人は、地下鉄でコヴェントガーデンまで出た。この日は７時 45 分から「Lyceum シアター」でミュージカル「ライオンキング」を観る予定だった。たくさんの劇場がひしめき合うロンドンでは、日本よりずっと安くミュージカルが楽しめる。ロンドン最後の夜をミュージカルで飾れることに私たちは心を弾ませていた。劇場に着いたのは６時 45 分だった。ところが、当日券は売り切れで、キャンセル待ちの列に並ぶように言われた。「そうか、今日は土曜日だったんだ」とその時はじめて気がついた。しかたがない。並ぶことにしよう。どうせ重松さんはまだなのだし……。彼女には「私たちが切符を買っておくから、ゆっくり来ればいいよ」と言ってあった。それにしても、この長い列のどのあたりまで切符が廻ってくるのだろう。７時すぎに、劇場の人がやってきて、「今夜はキャンセルはあまり出ないだろう」と言い、10 番目くらいに並んでいた私たちのところでは「このへんの人はたぶん無理だと思います」と言った。瀬川さんが劇場情報を調べ、「歩いて 10 分ちょっとの「Her Majesty's シアター」で「オペラ座の怪人」をやっているから、そちらに先に行って切符を買えたら買っておくよ」と言っているところに重松さんがふうふう言いながら到着した。彼女はその日も精力的に歩き回って、ナショナルギャラリーを見た後、テムズ河に今年できたばかりの「ミレニアム・ブリッジ」を渡り、シェークスピア劇の「グローブ座」の外観を見て、2000 年５月にオープンした「テート・モダン」つまり現代美術館を見てきたという。６人が揃ったところで、「Her Majesty's シアター」のあるピカデリーに向かって歩きはじめた。この劇場は 1705 年に建てられた由緒あるもので、ここ数年「オペラ座の怪人」を上演しているという。ところが、やはりこちらも当日券は売り切れで、キャンセル待ちの列に並ぶことになった。
本当にロンドンではキュー（列）があちこちにできる。まるで「キューがあればその後に並ぶ」ゲームでもやっているみたいに。並べば必ず手に入るものならともかく、キャンセル待ちの場合には、いくら並んでいてもキャンセルがでないことには切符は手に入らない。延々と並んで、結局キャンセルがでなければ、並び損というものだ。それでも、私たちの後にはどんどんと人が並んだ。15 分も並ぶと、私たちの中ではいらいらが募り始めた。「もう、あきらめよう」と言う他のメンバーに向かって、私は「あと５分だけ……」と頑固に頑張った。あきらめて列を離れたとたんにキャンセルが出るような気がして、なかなか踏ん切りがつかないのだ。第一、私たちの後ろにこれほどの長蛇の列が出来ているということは、まんざら可能性がないわけではあるまい。問題は可能性がどれほどあるかだ。私の前に並んでいる青年に声をかけた。

「もう 20 分以上も並んでいるのだけれど、切符は手に入るかしら？」
「無理だね」
そんなの当たり前だと言わんばかりの言い方だった。
「並んでいても切符は買えないってこと？」
「そういうこと」
「では、どうしてあなたは並んでいるの？」
「別に。ガールフレンドを待っているんだ」
あっけに取られているところに、ガールフレンドが到着し、ふたりはイチャイチャしながら行ってしまった。
「ウソでしょ……！？」と私は思った。
「ああ、やめた、やめた。こんなアホくさいこと！」
こうして私たちはようやく列を離れて歩き出した。1 つ目の劇場に並んだ 6 時 45 分からちょうど 1 時間が経っていた。
「チャイナタウンに行ってみようか！」
この瀬川さんの提案で、みんなの気分がいっきに明るく変わった。10 分たらず歩くと、ピカデリーサーカスに出た。この場合の「サーカス」とはいくつかの道が集まる円形広場のことをいう。広場に沿ってデパートやショップが立ち並んでいて、東京でいうと新宿といったところか。「TDK」とか「SANYO」と描かれた派手な電飾看板は、そういえば「ヨドバシカメラ」とか「サクラヤ」の看板を思わせる。この広場から北東方向に湾曲した道路の両側には、有名ブランドの店がずらりと並んでいて、日本人観光客にはとりわけ人気のスポットらしい。私たちがめざすチャイナタウンは広場の北東側にあった。中国風の大きな門をくぐると、漢字の看板のお店が並び、中華街独特の雰囲気に包まれていたが、しばらく歩いてゆくうちに、そびえたつビルの 1 階は中国風でも、2 階以上はまったく普通のイギリス風の古い建物だということが分かった。いくつかの中華料理店を見て廻って、一番安そうな店に入った。女性 4 人は 5.8 ポンド（1000 円）のコースを、男性 2 人は 7.8 ポンド（1400 円）のコースを取り、これにビールを頼んだ。
　ロンドンでの最後の夜の乾杯。「お疲れさま！」と言いながら、私たちはグラスを合わせあった。料理の味はそこそこで、これまでロンドンのレストランで食べた中では、一番まともなディナーと言えた。愛想のよい中年の中国人ウェートレスが、私たちの横を通る度に「美味しい？」と尋ねる。その度に私たちは笑いながら、口を揃えて「美味しい！」と答えた。

　外に出ると、すでに日は暮れて、街はすっかり夜の顔をしていた。レスター・スクエアの地下鉄の駅の近くで、「一足お先に帰っているわ」と言う加納さんと黒木さんと別れ、上田さん、瀬川さん、重松さんと私の４人は１軒の本屋に入った。外から見ると酒屋に見える本屋で、つまりワインや絵はがきなどを売っている奥に本のコーナーがあった。ちょうどバーゲンをやっていて、私はペーパーバックスを６冊も、読むかどうかはまったく怪しいものだったけれども、１冊 75 ペンス（135 円）という安さに惹かれて、買い込んでしまった。
　もう一軒、ロンドンの「紀伊国屋書店」という感じの大きな本屋に入った。４人はそれ

ぞれに興味のあるコーナーを見て歩いた。私は「科学」、「環境」、「教育」と見た後、「医学」のコーナーで釘付けになってしまった。「Menopause（メノポーズ）」、つまり「更年期障害」に関する本が棚１面にぎっしりと並んでいたのだ。医学書のようなものもあれば、体験本のたぐいもあり、一番多かったのは「誰にでも訪れるものです。その時期がきたら素直に受け入れましょう」というような書き出しで始まるハウツーものだった。年齢的に人ごととは思えないし、「老い」のテーマは以前から強い関心があったので、１冊買って帰って、日本の本と見比べてみるのもおもしろそうだと思ったけれど、手に取るとどれもずっしりと重いし、値段も高いので、結局買わなかった。

本屋の閉店時刻は午後 11 時で、20 分前くらいから５分刻みで「閉店まであと何分です」というアナウンスが流れた。さすがに 11 時近くになると客もまばらで、時間を惜しむように忙しく歩きまわる４人は、店内のあちこちですれ違った。閉店までねばって、煌々と明るい本屋から外にでると、闇の中に、まるで映画のセットみたいなロンドンの街並みがぼわっと浮かび上がった。

**◆7 月 8 日（日）◆**

日本に帰る飛行機は午後 1 時にヒースローを発つ予定だった。出発２時間前には空港に着くようにと、アールズコートのホテルを午前 10 時に出て、ピカデリーライン１本で、予定通りに 11 時にはヒースローに着いた。ところが、そこで目にしたものは、それまで見たこともないような恐ろしく長いキューだった。「まさかこの後ろに並べというのではないでしょうね」と思わずにいられないほどの長さで、しかし、そのキューに並ぶ他には帰国するすべはなかった。１時間並んでようやく順番がまわってきて、飛行機のチケットを受け取り、重いスーツケースを預けて身軽になった時には、とっくに 12 時を過ぎていて、私たちはあわただしく出国審査をすませ、足りないみやげものを大急ぎで買い足して、出発ゲートに向かった。午後 1 時 20 分、東京行きのヴァージンアトランティック機は、20 分遅れでヒースロー空港を飛び立った。

まったく最後まで、イギリス名物のキューにはうんざりさせられたけれど、今となれば、それさえもなつかしい気がする。

**◆7 月 9 日（月）◆**

午前 9 時、快晴の成田に着いた。

空港で解散する前に、「最後に全員で記念写真を撮ろう」と、瀬川さんがカートに積んだスーツケースの上に慎重にカメラを置き、自動シャッターのタイマーをかけた。私たちは疲れた体に鞭打って、合図を送るカメラに向かってにっこりと微笑んだ。旅行の記録として、そのデジカメが取り込んだ映像は全部で 568 枚もあったが、最後のその 1 枚だけが、日本で撮ったことになる。（終）